掛かってしまっているかもしれません！《完結》

室賀小史郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘が掛かってしまっている。

それは自分の愛するトレーナーのことになればなおさらである。

そんなウマ娘たちの恋のお話。

ｐｉｘｉｖでも連載しております。

※気儘更新です。

浮かばなくなったら終わります。

目次

トレーナーさんが浮気した！ ―― 1
方程式が解けない ―― 8
言わないで ―― 15
華麗に、優雅に、美しく！ ―― 23
キングは下を向かないわ！ ―― 32
トレーナーさんとイチャイチャしたいデス！ ―― 41
こんなことしてる場合じゃないんです ―― 49
女帝が聞いて呆れるな ―― 58
トレーナーさんは私だけだよね!? ―― 69
釣り上げたのはどっち!? ―― 78
不覚です……！ ―― 90
日本総大将の二つ名は伊達じゃありません！ ―― 99
一番を譲る気なんてないんだから！ ―― 108
私の計画に狂いはありません！ ―― 119
幸せだね、トレーナー♪ ―― 126

トレーナーさんが浮気した！

「タ゛イ゛シ゛ン゛!!タ゛イ゛シ゛ン゛タ゛イ゛シ゛ン゛
゛ーーーーーーッ!!!!」
とある日の夕暮れ時。
多くのウマ娘たちがこの日のトレーニングを終え、ここ練習コース場を去っていく。
そんな中、コースの使用時間ギリギリまでトレーニングを行うのはナリタタイシン。
今日は自身のトレーナーが出張で傍を離れているため、彼女はトレーナーに渡されたトレーニングメニューをこなした。
トゥインクルシリーズを終えてからは『走ること＝自分の存在意義』と思わなくなり、もともと走ることが好きなのもあって、加えて今日は過保護なくらい煩いトレーナーがいないこともあって、外出届けを寮長へ提出し、軽く流す程度に自由に走るつもりで残っていた。
そこに普段から良く行動を共にするウイニングチケットが、既にギャン泣きした状態で突撃してきたのだ。
「うっさ……重いんだけど……てか離れろ」
ウイニングチケットに飛びつかれ、尻もちをついたナリタタイシン。
しかし飛びついてきた側は、ぐしゃぐしゃになった泣き顔のまま、
「うぇっ……えぐっ……ごめ……うわぁぁぁぁぁんっ!!!!!!」
更に泣き出してしまう。
こうなると走っている場合ではない。
ナリタタイシンは「めんどくさ……」と愚痴を零しながらも、なんだかんだ友達を放って置けないので、落ち着くまでその背中を擦ってあげるのだった。
◇
「ちょっとは落ち着いた？」
「うん……ありがとう……」

少ししてウイニングチケットがちゃんと会話出来るまでに回復したところで、ナリタタイシンは彼女の右隣に移って「で、何があったの？　別に興味ないけど」と訊ねる。
彼女のことだから何か彼女的に感動の場面でも見てしまって泣いてたんだろう、とナリタタイシンは考えていたが、
「トレーナーさんに浮気された……」
「……は？」
天地がひっくり返っても起こり得ないことを言われて素っ頓狂な声が出てしまった。
それもそのはず、ウイニングチケットと彼女の担当トレーナーは付き合っていて、学園の誰もが認めるバカップルだ。
昼は常に互いにトレーナーお手製弁当を食べさせ合い、トレーニングでいいタイムが出ればハグしてグルグル回るし、毎回寮まで送ってはまたねのキスをして、朝のお迎えの際にはおはようのキスをする。
なのにそんなトレーナーが浮気をしたとウイニングチケットは泣いて訴えてきた。
ナリタタイシンとしてはこういった男女の話は御免蒙りたい所存であるが、聞いてしまった以上……何より友達である以上は聞いてあげないと自分の良心が許さない。
「浮気って……その現場を見たの？」
「うん……トレーナーさんってば、アタシがいるのにその黒鹿毛の子ばっか撫でて、「ん～、かわいいなぁ♪　お耳も尻尾もふわふわで美人だなぁ♪」って言って頬擦りしてたんだよ！」
「え、目の前でってこと？」
「そうだよ」
「何それ、最低じゃんっ！　そんなヤツだって知ってれば、アタシはチケットの背中押さなかったのにっ！　あのトレーナーならチケットを幸せにしてくれるって信じたからなのにっ！」
その場から立ち上がり、実際に浮気をされたウイニングチケットよりも怒りをあらわにするナリタタイシン。
ナリタタイシンはウイニングチケットがどれだけ日本ダービーに

そのバ生を懸けてきたかを知っている。
　そんな彼女の夢を実現させたトレーナーに惚れてしまうのも仕方ない、と思っていた。
　だからこそもう一人の友達ビワハヤヒデやその妹のナリタブライアンともグルになって、水族館に誘って二人きりにさせたり、カップルに大人気のカフェに誘っては自然な流れで二人を別のテーブルにつかせたり、トレーナーにそれとなくウイニングチケットの趣味や好きなことをみんなして教えてきた。
　二人が付き合うことになったのは自分のことのように嬉しかったし、そうなってくれて本当に、安心していたのだ。
　なのに、そのトレーナーが浮気した。
　これは由々しきことだ。
　なにより安心して委ねた友達を泣かせた罪は大きい。
「チケットの相手だけど、もうそんなヤツ庇う必要もないよね？」
「え？」
「アタシが蹴っ飛ばしてやる！」
「だ、ダメだよ！」
「浮気するような男はウマ娘に蹴飛ばされて○ねばいいんだよ！」
「でも……」
「デモもストもない！　アイツはアタシの友達を悲しませた！　蹴飛ばす理由はそれで十分過ぎるんだよ！」
　そもそもチケットは浮気されたのに優し過ぎる、とナリタタイシンが強い口調で責めていると、
「ここにいたのか、チケット。タイシンも一緒だったんだな」
　二人の友達ビワハヤヒデがいつものようにやってきた。
「ハヤヒデ！　聞いてよ、チケットのトレーナーが屑野郎だったんだ！」
「……チケットからなんて聞いたんだ？」
「チケットと同じ黒鹿毛のウマ娘と浮気してたんだよ!?　しかも目の前で！　最低じゃん！」
「……浮気相手はウマ娘ではないし、そもそも浮気をしていない

んだ」
「……は？」
ビワハヤヒデの言葉にナリタタイシンは本日二度目となる素っ頓狂な声が出る。
どういうことなの、と一人困惑しているナリタタイシンにビワハヤヒデは「やれやれ……」と肩を竦め、
「相手は黒猫だ。しかも学園に迷い込んできた野良猫。野良猫に嫉妬したチケットは君に慰めてほしくて黒鹿毛なんて言ったんだろう」
真相を話し、ウイニングチケットへ視線をやった。
そうすれば、ウイニングチケットは頬を微かに膨らませて「だってあの猫メス猫だもん。メス猫なら浮気だもん」と不貞腐れ気味に体育座りして返す。
「あのな、チケット。猫にヤキモチを焼くなとは言わない。しかし自分の愛する者が猫を可愛がっていただけで浮気だと叫び、首筋や頬、しまいには額にくっきりとキスマークを付けた上で泣きながら立ち去るのはどうかと思うんだ」
ビワハヤヒデの軽くも細かい経緯説明にナリタタイシンは思考が停止。
そして徐々に冷静さを取り戻してくると、ウイニングチケットがそういうバカだったという事実を思い出す。
「チケット。君のトレーナー君は君への愛を叫びながら、今も君を探している。早く戻って安心させてやれ。そしてちゃんと謝るんだ」
「……浮気したのに？」
「だからそれは浮気ではないと説明したろう？」
だって、可愛がってたのはメス猫だもん……とまた頬を膨らませるウイニングチケットに、ビワハヤヒデは小さくため息を吐いた。
しかしそうなってしまうのは理解はするので、ビワハヤヒデはもうそれ以上は何も言わないことにする。
すると、
「バッッッッッッカじゃないのっ!?」
今まで黙っていたナリタタイシンが爆発した。

「アンタ、コッチがめちゃくちゃ心配したのに、蓋を開けてみたらそんなちっぽけなことであんだけ泣いてたワケ!?　信じらんない！　心配した時間を返せ！　危うく冤罪のトレーナーを蹴飛ばすとこだったじゃん！　メス猫に嫉妬して泣いてたとかふざけんな！　アタシは今日アタシのトレーナーが出張でいなくてキスすら出来ないでいるのに！　なのにアンタは嫉妬してキスマーク付けた!?　だったらアタシは毎日毎日嫉妬してるよ！　だってアイツ誰にでも優しいんだもん！　アタシがチケットみたいにしてたらアタシ以外のヤツと話してる度に嫉妬してアイツ今頃皮膚病を疑われるレベルでアタシのキスマークだらけになってるからね!?　会いたいよ！　アタシだってトレーナーに会ってキスしたいよ！　イチャイチャしたいよ！　アンタそう出来るのに心配かけて大バカ娘だよ！」

ふー、ふー、ふー……と一気にまくし立てたナリタタイシンはまるで菊花賞を走り終えた時みたいに両肩で息をする。

その小さな体からは想像も出来ない大声に、ビワハヤヒデもウイニングチケットも思わず耳を手で塞いだほど。

「……ごめ、ごめんな、さい……タイシンがタイシンのトレーナーさんと離れ離れで辛いのに、アタシ……アタシ……うぉぉぉぉぉんっ、こ〟へ〟ん〟な〟さ〟ーーーーーい〟っ」

ようやく反省してまた泣き出すウイニングチケット。

するとナリタタイシンは「あ、アタシ何言ってんだろ……」と赤面し出す。

ビワハヤヒデは『ああ、もうめちゃくちゃだ』と天を仰いだと同時に――

（私、まだ自分のトレーナー君とキスすらしたことがない……）

――と好敵手二人が自分より遥か先のステージに進んでいることに敗北感を与えられた。

（しかし仕方ないじゃないか。いざ愛するトレーナー君と二人きりになると幸せ過ぎて、ただ彼の肩に頭を乗せているだけで満足してしまうんだ！　それにトレーナー君は相当なテクニシャンだからな。何せあの魔性のナデナデは私を蕩けさせる！）

そう頭の中で言い訳するビワハヤヒデ。
こうなってしまっては、誰が先に冷静さを取り戻せるかが鍵となる。
「チケゾー！」
そこへナリタタイシンの魂の惚気叫びを頼りにウイニングチケットのトレーナーが馳せ参じた。
「ト”レ”ーナ”ーさ”ーーーん”っ！」
ウイニングチケットもトレーナーに駆け寄り、その胸に飛び込む。
全身全霊のダイブではないので、トレーナーも難なく彼女をその胸に受け止めた。
「チケゾー、探したんだぞ？」
「……う、うん……♡」
バツが悪そうにウイニングチケットは返しながらも、耳はピコピコ尻尾はふわりふわりとトレーナーが探しに来てくれた喜びを表している。
そもそもウマ娘特有の甘えたい時の仕草である、「頭を擦り寄せる」を無意識にしているのだから。
「俺は浮気なんてしてない。チケゾー一筋だ」
「……でも、アタシ……メス猫でも嫉妬しちゃう……」
「嫉妬してくれるくらい、俺を想ってくれてて嬉しい」
「いいの？　あんなことしちゃったのに……」
「俺、好きな子なら大抵のことは許せるんだ」
「トレーナーさん……♡」
「まあ流石に浮気されたら悲しいけど……」
「しない！　アタシがトレーナーさん以外に尻尾を振るなんて有り得ないから！　一生、ずっと、トレーナーさんだけだから！」
いつもの彼女らしい熱い気持ちに、トレーナーは思わず目を細める。
「ありがとう、嬉しいよ。じゃあ、改めて……仲直りしてくれるか？」
「うん♡　勿論！♡　ごめんなさい！♡　大好きだよ！♡」
晴れて仲直りし、熱い抱擁を交わすバカップル。

ビワハヤヒデは「良かった」と満足げだが、
「なんかアタシだけ損した気分なんだけど……」
ナリタタイシンに至っては何かを失ったような損失感に苛まれるのだった。
後日、ウイニングチケットと担当トレーナーが相変わらずイチャイチャしている影で、ナリタタイシンが自分の担当トレーナーに昼休み中引っついていたという。

方程式が解けない

「すまないな、タイシン。私の買い物に付き合ってもらって」
「別に。アタシも丁度欲しかった本があるから付いてきただけだし」
「ふふっ、感謝する」
「ん」
今日は休日。
オフが重なったビワハヤヒデとナリタタイシンは共に駅ビルの中にある大手の書店で本を購入した。
因みに求めていた物はビワハヤヒデが数学の参考書。ナリタタイシンは料理本。
「タイシンは相変わらずトレーナー君への愛妻弁当の探究か？」
「別にそんなじゃない。ただ、レパートリー増やした方があとあと楽じゃん」
「あとあと？」
「……だから、これから先もずっとアタシがアイツが口に入れる物を料理するのに今作れる料理のローテーションだと飽きられるでしょ」
ナリタタイシンのぶっきらぼうながら早口な返答に、ビワハヤヒデはメガネをクイッと上げながら、内心彼女が自分のトレーナーとの先の先まで見据えていることに舌を巻く。
彼女は今でも料理のレパートリーは多い方だが、彼女の先程の答えはトレーナーとの結婚後のことまで視野に入っているからだ。
ビワハヤヒデは本当に自分は置いてけぼりを食らっている、と思う。
同じくオフであるウイニングチケットは相変わらず今日も今日とて自分のトレーナーとデートしているし、ナリタタイシンは自分のトレーナーと離れていても心は常に傍にいるのだ。因みにナリタタイシンのトレーナーは今また別件で出張中。
そんな二人に対して自分は己の知識の探究心を満たすために数学の参考書を手にしている。

（私は本当に何をしているのだろうな……）
本当ならばトレーナーを誘うべきだった。
しかし今日はトレーナーに先約があったので、それは叶わなかったのである。
（いや、言い訳だな。彼を想うのであれば、彼を想って私なりの行動を取るべきだ）
ビワハヤヒデはそう思ったところで、ピタリと足が止まった。
「ん？　ハヤヒデ、どうかした？」
「……タイシン」
「何？」
声が震え、明らかに動揺する親友を見て、ナリタタイシンは彼女が凝視する方へと視線をやる。
「あれって、ハヤヒデのトレーナーだよね？」
「ああ……紛うことなき、我が愛しのトレーナー君だ」
「隣に女のヒトがいる」
「……そうか。やはり私の見間違いではないのだな」
視線の先にはビワハヤヒデのトレーナーがいた。
しかし彼の隣には、ナリタタイシンまでとはいかないが小柄で可愛らしい女性がいる。しかも遠目から見ても二人はかなり親しげだ。
「はは……彼はやはり、ああいういかにも女の子というタイプが好みらしい」
「え、いや、ち、違うかもよ？」
「フォローはしなくていい。逆に虚しくなるだけだ」
彼は浮気をするような男ではない。
つまりは恋人兼担当バよりもあのヒト娘のことを優先するような間柄だった、というだけ。
しかしビワハヤヒデは自分が普通の女性とは違って可愛げのないのがいけないのだろう、と思ってしまう。
そんなことを考えていると、ビワハヤヒデは知らぬ間にボロボロと涙を零していた。
これにはナリタタイシンも焦る。それと同時にビワハヤヒデのト

レーナーへ怒りが込み上げてきた。
　ビワハヤヒデは一途に彼のことを想っているのに、当の本人はその自覚がないのだから。
「アタシが一発蹴飛ばして来ようか？」
「……いや、そんなことをしても何も解決しない。そもそもウマ娘が人に怪我を負わせたとなると、大ニュースになるしタイシンの今後に悪影響しか生まない。気持ちだけ受け取っておこう」
「でもこのまま何もしないのって……」
「いいんだ。そもそも私に彼のような男性は勿体無いとすら思っていた。だからこれでいいんだ」
　ナリタタイシンはビワハヤヒデの気持ちを聞いてグッと怒りを押さえる。
　すると彼女のトレーナーと女性の元へ、壮年の夫婦らしき男女がにこやかにやってきた。
「ハヤヒデ、あれは誰か知ってる？」
「あれは……トレーナー君のご両親だ。ＵＲＡファイナルズが終わったあと、わざわざ控え室まで挨拶をしに来てくれた」
「そっか……ん？　ねぇ、ハヤヒデのトレーナーって兄弟いる？」
「大学受験を控える歳の離れた妹さんがいるとは聞いている」
「じゃあさ、隣にいるのその妹なんじゃないの？」
　その時、ビワハヤヒデに電流走る。
「そうか。妹さんがオープンキャンパスか何かでトレーナー君を頼り、ご両親は旅行ついでに付いてきたのかもしれない！　いや、そうであれば辻褄が合う！」
　息を吹き返したかのように目に光が戻るビワハヤヒデに、ナリタタイシンはホッとしつつも、
（また無実の人を蹴飛ばすとこだった……というか、最近こういうの多い気がする）
　自分の足癖の悪さを反省した。
「……タイシン、私は決めたよ」
「？　何を？」

「今日、今ここで決める」
「……は？」
　素っ頓狂な声を出すナリタタイシンだが、ビワハヤヒデは既に涙を拭いて彼女の元を離れ、自身のトレーナーがいる一団へと歩を進めている。
　その気迫はＵＲＡファイナルズ長距離決勝をモノにした時と同等の気迫だった。
（……まあ、一応見届けバになってあげた方がいいのかな）
　なのでナリタタイシンはビワハヤヒデの背中を追うことにした。
◇
「トレーナー君。奇遇だな」
「おや、ハヤヒデさん。タイシンさんと買い物ですか？」
「ああ、数学の参考書を買ってきたところだ」
「……どうも」
「おお！　○○の担当バの！　元気そうで何よりだ！」
「あらあらまあまあ！　会えるだなんて嬉しいわ！」
「え、ホントにビワハヤヒデさん!?　うわぁっ！　しかもナリタタイシンさんまで！　本物だ！」
　二人の登場にトレーナーの家族は大興奮。
　特に妹はビワハヤヒデの大ファンであり、ＢＮＷの三人が大好きなのもあって人一倍感動している。
「そういえば、○○はハヤヒデさんに会うのは初めてだったね」
「うんっ！　決勝戦の時は模擬試験でレース場まで行ってられなかったから……」
「それで私たちだけレース場まで観光に行ったもんだから、帰ってから○○に散々嫌味を言われたのよねぇ」
「だってお母さんたちがビワハヤヒデさんと撮った写真を見せびらかしたりするからでしょ!?　私は試験でレース場旅行我慢したのにさ！」
　当時の悔しさが蘇ってきた妹が両親を睨めば、両親は揃って苦笑いした。

ナリタタイシンは『仲いいな、この家族』と微笑ましく感じている中、
「写真くらい、今後いくらでも一緒に撮れますよ」
ビワハヤヒデは既にトレーナーの生涯の隣をロックオンしている。
「本当ですか!?」
「ええ。それより、私に敬語は不要ですよ。私の方が年下ですし、何より私の愛するトレーナー君の妹さんですから、気安く接して頂きたい」
「……へ？」
「は、ハヤヒデさん？」
困惑するトレーナーと面を食らった家族。
しかしビワハヤヒデは構うことなく、トレーナーの左腕に両手を絡め、彼の肩にしなだれる。
「トレーナー君もそのつもりで私と交際してくれているだろう？♡
ならばご家族には早めに伝えておいた方がいいと判断した♡」
「あ、ああ、なるほど……？」
「む、そうなると私は妹さんの義姉になるのか。なんだか不思議な感覚だな。義姉であり、実年齢は妹的立場というのは……ふふっ」
ナリタタイシンは『うわぁ、完全に掛かってるわぁ』と思いつつ、『まあハヤヒデが幸せそうならいいや』と成り行きを見守る。
「お付き合いしていたのはこの前知ったけど……」
「そうか。お前ももう嫁さんを貰う歳だもんな。そうなるよな」
「え、え？　えっ？　お兄ちゃんがビワハヤヒデさんと付き合ってて、結婚するの？　え、推しが兄嫁に？」
「ということですので、今後とも良きお付き合いを。不束か者ではありますが、彼を一生支えられる伴侶になれますよう誠心誠意努力します」
ビワハヤヒデがそう言ってトレーナーの家族に頭を下げると、トレーナーも決意したのか目の色が変わり、家族に――
「式の予定とかはまだ未定だけれど、彼女と結婚するよ。彼女共々、これからよろしく」

――頭を下げた。
ナリタタイシンは『おお、やるじゃん』と感心しつつ、『アタシのトレーナーだったら……』と今の状況を自分とそのトレーナーに置き換えて妄想が捗る。
「ということで、タイシン。悪いが、ここで君と別れてもいいだろうか？」
「っ……あ、うん。いいよ。なんだったら参考書、寮まで持って行こうか？」
「それは悪い……いや、参考書を持ったままというのも変だな。よろしく頼む」
「ん。ニンジン一本ね」
「任せろ。国産の三ツ星を用意する」
「ん」
こうしてナリタタイシンはその場を離れ、ビワハヤヒデはまさに新妻といった態度でトレーナーに侍り、その家族と賑やかで幸せな休日を過ごした。
◇
ビワハヤヒデと別れたあと。
「あ、もしもし、トレーナー？　今いい？」
『おお、タイシンか。どうかしたのか？』
「別に。アタシがいないのをいいことに浮気してるかなって思って」
『してる訳ないだろ。俺は一生タイシンだけだ』
「うっさい、バカ♡　真っ昼間から何恥ずいこと口走ってんの♡」
『言われたくて振ってきたようなもんだろ……』
「はあ？♡　自意識過剰じゃない？♡　てか浮気してるから、そう言えばアタシが誤魔化されるって思って言ったとかさ♡」
『んな訳ないだろ！　俺はタイシン一筋だ！　ナリタタイシンは俺の一生の愛バなんだ！』
『はいはい、だからうっさいって♡　あーあ、恥ずかし♡　大の大人が電話でカノジョに愛を叫ぶとかさ……♡』
『ったく……相変わらず、天邪鬼だな』

「面倒くさい女でごめんね♡」
『全然悪びれてねぇだろ？』
「だって口ではなんとでも言えるしー？♡　休日にカノジョをほっといて不安にさせるのが悪いしー？♡」
『だから今日はタイシンの親父さんと一緒に花の新しい仕入れ先を開拓しに行ってるだけだ！　浮気目的で同行してるんじゃない！』
「必死過ぎ♡　そんなにアタシに浮気を疑われるのイヤなんだ？♡」
『当たり前だろ！　こんなにこんなに愛してるのに！　浮気を疑われるとか冗談じゃない！』
「っ……うん、そうだよね♡　アンタはアタシのだもんね♡」
『ああ。分かってくれたか？』
「分かんないから早く帰ってきて分からせて♡」
『……夕方に帰るから、外泊届出して俺の部屋にいろ』
「はーい♡　晩御飯作って待ってる♡　期待してるね……ちゅっ♡」
愛するトレーナーとの電話を終えたナリタタイシンは、
「アタシバカじゃないのっ!!!」
街中で、しかもデレデレになって受話器越しにキスまでし、冷静さを取り戻してその羞恥に堪えかね、鬼の末脚で寮まで爆走するのだった。

言わないで

ある日の昼休み。
ナリタタイシンは一人で自分のトレーナーがいるトレーナー室で重箱を広げて待っていた。
近頃はビワハヤヒデも自分のトレーナーと昼食を共にすることが増え、ナリタタイシンもそれならばと自分も自分のトレーナーと過ごそうと今に至る。
（作れそうなのから片っ端から作ってみたら重箱になっちゃったな……）
反省するナリタタイシンだが――
（ま、でも何が好きか苦手か反応見れるからいいか。アイツ大食いだし）
――効率的な思惑があるのは確かだ。
そんな彼女のトレーナーはというと、つい先程電話だということでトレーナー室の外に出ていった。
外にいると言ってもそれは形式的なもので、扉の前で電話をしているし元から声も大きいため、ナリタタイシンには彼の声が全て聞こえている。
『分かった。再来月の土曜日な。その日ならタイシンも空いてるから一緒に行けるよ』
どこかに行く約束をしているようで、ナリタタイシンは『何勝手にアタシも行くこと決めてんの……』と思いつつ、
（今度はアタシを置いてかないんだ……感心感心♡）
とても満更ではない様子で鼻歌交じりに尻尾がゆらりふわりと揺れた。
ガラガラ――
「ごめんな、タイシン。お待たせ」
「別に。それより何の電話だったの？」
トレーナーをソファーに座らせ、今はすっかり定位置となった彼の

膝上に腰を下ろし、慣れた手付きでたまごサラダを彼の口に運ぶナリタタイシン。
「もぐもぐ……高校の時の友達からだ。再来月結婚式を挙げるから、出席してほしいって。出来ればタイシンもって。そいつの嫁さんがタイシンのファンなんだってさ」
「ふーん……アタシ、結婚式に着て行くようなドレスとか持ってないけど？　次は唐揚げね。あーん♡」
「あむっ……もぐもぐ……ドレスは気にするな。今日の放課後に仕立て屋を呼んである。そして俺のパートナーである以上、俺が用意するから」
「何それ？♡　アタシまだ行くなんて一言も言ってないんだけど？♡」
「一緒に行ってくれないのか？」
　体格の宜しいトレーナーが捨てられた子犬のような目をしてナリタタイシンに言えば、ナリタタイシンは尻尾の付け根がいい意味でゾワゾワする。
　ナリタタイシンはトレーナーのこういったギャップが大好物なのだ。
「アタシとそんなに行きたいんだ？♡」
「ああ、行きたい」
「ふーん♡　そっか♡　じゃあ、今日作ってきた料理を残さず食べて、感想言ってくれたら考えてあげる♡」
「ああ、ありがとう、タイシン！」
「うっさ♡　いいから、早く食べてよ、片付かないじゃん♡」
　こうしてナリタタイシンはルンルン気分でトレーナーと昼休みを過ごし、放課後まですこぶる絶好調だった。
◇
　それから一ヶ月。
　ナリタタイシンのオーダーメイドのドレスが無事に届いた。
「おぉ！　綺麗だぞ、タイシン！」
「うっさい、バカ♡　てか、仮縫いの段階でも見てたじゃん♡」

「完成形は初めてだ！　色合いもタイシンに良く似合うし、惚れ直した！」
「あっそ♡」
　相変わらずぶっきらぼうな言い草なナリタタイシンだが、耳と尻尾は素直に機嫌良く揺れている。
　パーティドレスはシンプルなＡラインのワンピースドレスで、袖は七分丈。但し袖から鎖骨部分にかけては薄い桃色のシースルー。胸元からスカートは薄い黄色で、腰に巻いてある黒色のリボンの中央には、ワンポイントとしてラナンキュラスの造花があしらわれていた。スカートの丈はミモレ丈。
　因みにラナンキュラスはナリタタイシンの誕生日６月１０日の誕生花。
　あとはこのドレスに合わせたアクセサリーとヒール。これも全てトレーナーがプレゼントしている。
　ネックレスとブレスレットはホワイトパールで、それも彼女の誕生石であることからトレーナーの彼女への愛が伝わってくる。
　なのでナリタタイシンは嬉しくて仕方ない。
　そんな彼女の様子を見て、トレーナーも思わず頬が緩んだ。
　一方、トレーナーに至ってはグレーのフォーマルスーツに白いシャツと薄い黄色のネクタイで出席する。
　あとは一緒に友人の結婚式へ臨むばかり。

　だったのだが。

◇

「……」
「タイシン……」
　結婚式が明後日に迫ったこの日、ナリタタイシンは風邪を引いて倒

れ、学園の保健室へ担ぎ込まれた。
昨日、迫っている結婚式のことでいても立ってもいられず、雨の中走り込んでしまった結果だ。
保健医が言うにはしっかり休んで栄養を摂れば熱は下がるだろう、とのこと。但し暫くは安静と言われた。
「ん……ここは？」
「目が覚めたようだな。ここは学園の保健室だ。タイシンは授業中に机に突っ伏したままだったそうだぞ。ビワハヤヒデとウイニングチケットの二人がここまで運んで、俺のトレーナー室まで知らせに来てくれたんだ」
「そっか……あとで二人にお礼言わないと……」
「そうだな」
それからトレーナーは保健医から言われたことを彼女に伝え、
「それと、結婚式のことだが……」
明後日に控えた友人の結婚式に欠席する旨を告げようとした。
「……出席する」
「でも――――」
「言わないで」
「……タイシン」
「欠席しよう、なんて言わないで……アンタが初めて、アタシを置いて行かないのに。置いてかれたら、アタシ……」
ナリタタイシンはトレーナーと一緒に出席したくて堪らない。
せっかくトレーナーが自分のことだけを考えて色々と準備して用意してくれた。なのにそれを無駄にさせたくない。
何よりトレーナーの友人やその新婦さんに『これが、俺が育てた愛バのナリタタイシンだ』と紹介されたい。彼の隣に立って。
「明日は授業もトレーニングも休むから。寮で大人しくしてるって約束するから、だから……」
「当日、少しでも熱があったら泣いても欠席するからな？」
「……」
「返事」

「……や」
「おい」
「や！」
「ガンコタイシン」
「ふんだ。悪かったね、可愛げのないカノジョで」
「そんなこと思ってない。俺はタイシンを愛してる。そんな頑固なとこも」
「……バカじゃないの？」
「ああ、俺はタイシンと出会ってから、ナリタタイシンバカになってるよ」
「……うざ」
「タイシンが自分を追い込むから、俺はうざいくらい心配する側で丁度いいんだよ」
「……好き」
「ああ、俺も好きだ」
「……大好き」
「おう、俺も大好きだ」
「愛してる」
「愛してるよ、タイシン」
　愛の言葉を伝え合い、二人は互いの額を合わせる。
　本当はキスしたいが、風邪が移ったらいけないと額で我慢した。
「寮まで送るよ」
「……抱っこがいい」
「ああ、いくらでも」
「横抱きね」
「ああ、俺の首筋に顔埋めたいんだもんな」
「うん」
　こうしてちょっと素直になったナリタタイシンをトレーナーはお望み通り抱きかかえ、寮へ贈り届け、その帰りにビワハヤヒデのトレーナー経由でナリタタイシンの持ち物を届けてもらえるようお願いするのだった。

◇

結婚式当日。

無事に体調が戻ったナリタタイシンは、トレーナーにエスコートされて式場へとやってきた。

ナリタタイシンは皐月賞ウマ娘であり、天皇賞春秋、ジャパンカップ、有馬記念を制した有名バ。

なので新郎が新婦へサプライズプレゼントということで招待しているため、式の途中から参加となる。

「タイシン、本当に大丈夫か？」

「大丈夫だって。寧ろこのまま春天走れるくらい絶好調だけど？」

「そっか。良かった」

「アンタこそ大丈夫なわけ？」

「え、何がだ？」

「だってピアノ弾くんでしょ？」

「ああ、大丈夫大丈夫。ガキの頃からやってるし、しっかり練習してきたからな」

「ふーん、ま、信じてるけど♡」

今回の演出はトレーナーが先に式場へ入り、ピアノを演奏する。

演奏する曲は『Ｍａｋｅ　Ｄｅｂｕｔ！』で、トレーナーの友人である新郎はヴァイオリン演奏で参加するのだ。

ファンファーレの部分をトレーナーがゆったりと弾いたら、スタッフがゲート（扉）をオープンしてナリタタイシンが歌いながら入場するという流れ。

「さて、そろそろスタンバイだな！」

「はいはい♡」

「ダンスがない分、タイシンの美声をプレゼントしよう！」

「分かったって、うっさいな♡」

そして二人は新婦へ最高のサプライズプレゼントをするのだった。

◇

ナリタタイシンの登場と歌。そして新郎とその友人の生演奏に新婦はもちろんのこと、招待されていた人々も大いに盛り上がった。

中でも新婦は感涙でメイクが崩れる程で、お化粧直しをしてからナリタタイシンと何枚もツーショット写真を撮ってもらい、また泣いていた。
結婚式での恒例行事ブーケトスは何故か周りが空気を読み、新婦がまたまた泣きながら『タイシンさんに幸せになってほしいです！』とブーケを手渡され、これには流石のナリタタイシンも面を食らいつつも、断るのもアレなので受け取った。
「凄く喜んでもらえたな」
「そうだね……チケット並に泣き虫な新婦さんだったけど、あれくらいなら可愛いってレベルかな」
「そりゃあ、憧れの存在が自分の結婚式に来てくれれば誰だって泣くだろ」
「その憧れってのがアタシだと照れ臭いが先にくるんだよ……」
結婚式場からの帰り道、ナリタタイシンはトレーナーの運転する車の助手席で、先程の結婚式の話に花を咲かせる。その手にはちゃんと新婦から受け取ったブーケがあり、大切に持っていた。
「でも、本当にタイシンの大ファンなんだぞ？」
「本人からも聞いたって……」
「あの子、生まれつき体が小さくて、入退院を繰り返してたらしいんだ」
「……へぇ」
「そんで、アスリートウマ娘にはかなり憧れてたそうだ」
「……」
「そこに彼女と同じように体が小さいのに、圧倒的な走りをするナリタタイシンを見て、一気に世界が変わったんだと」
新婦はウマ娘。しかしトレーナーが言うように、彼女は元々が体が弱くてウマ娘でありながら普通のヒトと変わらぬ生活を送っていた。
ヒトと比べれば確かに力強く、足も早い。しかしそれだけ。周りのウマ娘と比べれば何も秀でていない。
なので勉強に励み、普通の生活をし、普通の恋をした。
当然、相手は今日結婚したトレーナーの友人。

ただ、彼女はネガティブな性格から相手に嫌われたくない思いが強く出て、積極的になれずにいた。
そんな時に恋人から『俺のダチが担当してるウマ娘が皐月賞で走るんだってよ。応援しにいかね？』とナリタタイシンのレースを観戦することに。
そこで観たナリタタイシンの走りに、彼女は勇気を貰った。
「やっぱりタイシンの走る姿は色んな人にいい影響を与えるんだな」
「……バカ」
そうは言うものの、内心では『アタシの走りでも誰かの力になれるだなんて……』と心が温かくなるのを感じているナリタタイシン。
しかし彼女はだからこそ思う――
（アンタがいなかったら、今のアタシはなかった）
――と。
ヒトである同級生たちにバカにされ、見返したくてがむしゃらになっていた。
足掻けば足掻くだけ、藻掻けば藻掻くだけ、足は言うことを聞かなくなっていく。
そこに手を差し伸べてくれたトレーナー。
彼の存在が自分にとってどれほど大きいのか、彼は分かっていない。
しかしナリタタイシンはそれを直接伝えるつもりはないし、気づいてほしいとも思わない。
何故なら――
「今度は俺とタイシンの結婚式にあの二人を呼ぼうな」
「まだ先じゃん……バーカ♡」
――彼は一生、自分の隣にいてくれるのだから、自分だけが分かっていればそれでいいのだ。

華麗に、優雅に、美しく！

あるところにひとりのお姫様がいました。
お姫様は美しく、愛嬌がありましたが、やんちゃなじゃじゃウマ娘でもありました。
そんなお姫様の前に、不思議な王子様が現れ、お姫様は王子様に一目惚れしてしまうのです。

――――――――――――――――

「と、ととと、トレーナーさんっ！」
「はい、どうしましたか、カワカミさん？」
「こ、ここ、こここ！」
「落ち着いて。私は逃げませんから、教えてください」
「はわはぁっ！♡」
ここはカワカミプリンセスが専属契約をしているトレーナーのトレーナー室。
今日はトレーニングを軽めにし、残りの時間はミーティングをということで二人はここにいる。
内容はＵＲＡファイナルズも終わり、次のドリームシリーズへ向けての方針を決めるため。
カワカミプリンセスは阪神ジュベナイルフィリーズから始まり、ホープフルステークス、桜花賞、オークス、秋華賞、エリザベス女王杯２連覇と有馬記念２連覇を達成し、ドリームシリーズへ行っても活躍が期待されている。
カワカミプリンセスのトレーナーは彼女を最強の乙女へと導いた指導者として、学園から新たにチームを結成することを勧められたが、
『私は今はカワカミプリンセスのことしか頭にありません』
と拒否した。

優秀なトレーナーには多くのウマ娘を導いてほしいが、強要して本人の指導力が落ちてしまっては本末転倒ということで一旦は保留。
話を戻し、カワカミプリンセスはドリームシリーズに進出して一先ず得意な中距離路線に進むという方針が決まった。
そしてミーティングが終わると、カワカミプリンセスが先程のように壊れかけのレディオのようになってしまっている。
それも当然で、カワカミプリンセスは自身のトレーナーに強い憧れと恋慕を抱いているためだ。
何故なら彼女のトレーナーは男性でありながら『美姫』と評されるほどの容姿を持ち、その上で幼い頃から習っている合気道の有段者。
普段は清く美しいのに、いざという時の凛々しさと男らしさ。そこにカワカミプリンセスはハートを射抜かれたのである。
トレーナーはスラリと伸びた長身で体の線が細い。加えて彼の母親である芦毛ウマ娘の血を引いているのもあって髪は美しい芦毛。華奢な体を少しでも大きく見せられるよう、髪を膝裏まで伸ばしている。スッと通った鼻筋にシャープな顎。長いまつ毛。細く整った眉。
その全てが女性の誰もが羨む麗しさだ。
しかしそのせいでほぼ１００％女性に間違われ、街でナンパをされることもしばしば。
トレーナーはまさにカワカミプリンセスが憧れるお姫様その者。華麗に、優雅で、美しく。なのにいざという時の頼り甲斐のある逞しさ。
故に彼女にとってトレーナーは理想の王子様なのである。
「大丈夫ですか、カワカミさん？」
「は、はひ……♡」
仰け反ってしまったカワカミプリンセスの背中を優しく抱きかかえてくれるトレーナー。
（近いですわ！♡　いい匂いですわ！♡　結婚したいですわ！♡　愛してますわ！♡）
なのでカワカミプリンセスの頭はトレーナーへの想いで膨れ上がる。

しかしそれを知らないトレーナーは優しく微笑み、彼女の言葉を待つのみ。
「あ、あぁ、あのあの、ですね……」
「はい」
「もう、ミーティングも、終わったこと、ですし……」
「はい」
「宜しければ、そのぉ……」
「寮へ戻る前に、今朝言っていたクレープ屋さんにでも寄り道していきましょうか？」
「っ……はいっ！♡」
察して先に誘ってくれたトレーナーにカワカミプリンセスは満面の笑みで返すと、彼に「よしよし」と首筋を優しく撫でられる。
するとカワカミプリンセスは自然と彼の胸板に頭を擦り寄せるのだった。
◇
ウマ娘が過ごす寮とは正反対の方へと歩を進め、お目当てのクレープ屋に到着。
ウマ娘向けのボリューミーなメニューも豊富なのでトレセン学園の生徒以外にも多くのウマ娘が列に並び、かなり繁盛している。
するとカワカミプリンセスは最後尾にトレーナーとは別の憧れの存在を見つけた。
「キングさんっ！　それとキングさんのトレーナーさんっ！　ごきげんようですわっ！」
それはキングヘイローとそのトレーナー、
カワカミプリンセスは二人のことを純粋に尊敬し、憧れのカップル。
なのでいつかは自分もこの二人のように、自分のトレーナーと恋仲になりたいと切に願っている。
「あら、カワカミさん。そのトレーナーも、ごきげんよう」
「よーっす。二人もここに寄り道しに来たのか？」
キングヘイローのトレーナーがそう訊ねれば、カワカミプリンセス

のトレーナーが会釈をしながら「はい」とたおやかに返事をした。
　因みにキングヘイローのトレーナーとカワカミプリンセスのトレーナーは同期。加えてカワカミプリンセスのトレーナーを一目見ただけで「男」だと判別出来た数少ない人物。
「お前、見た目もやしっ子なのにオグリ並に食うもんな」
「お恥ずかしい。今朝カワカミさんからここの話を聞いて、メガテラクレープが気になって気になって……」
「おいおい、あれウマ娘用だぞ……あ、お前の母ちゃんウマ娘なんだっけ？　なら胃袋の構造もそっち似か」
「はい。今日はおやつを我慢して食べてませんので、軽くイケるかと」
「考えただけで胸焼けするわ……」
　担当バを持った時期は違えど、二人は同期で且つウマが合う。
　なのでかなり親しげに会話が弾むが、
「ちょっとトレーナー、前進んだわよ」
「トレーナーさん、キングさんからメニュー表を頂きましたわ！　どんなのがあるか見ましょう！」
　二人の愛バがそれを阻んだ。
　キングヘイローはカワカミプリンセスのトレーナーを嫌ってはいないのだが、ウマ娘並みの容姿端麗なヒトが自分のトレーナーと親しげにしているのを見るとモヤモヤしてしまう。
　一方のカワカミプリンセスは折角の寄り道デートなので、自分に集中してほしいといったところ。
　それぞれの愛バにグイッと体を寄せられれば、二人のトレーナーは話を切り上げ、愛バに集中するのだった。
◇
「持ってもらってしまってすみません、カワカミさん」
「い、いえいえ！　お気になさらず！」
　先に並んでいたキングヘイローたちがクレープを購入して去ったあと、ようやくカワカミプリンセスたちの番になった。
　トレーナーは迷わずウマ娘用のメガテラクレープを頼み、カワカミプリンセスはストロベリー生クリーム。

そして暫くしてウマ娘の販売員がクレープを両手に抱えて運んできた。これにトレーナーは目を輝かせたが、問題は重量があって持てなかったこと。
なのでカワカミプリンセスがトレーナーの代わりに持つことにし、近くの公園のベンチに座って食すことに。
ただ絵面はアレだが、カワカミプリンセス的には愛するトレーナーにダイナミックあーんが出来ているので、気分はとても高揚している。
「ふむふむ……美味しいです。しかし流石に生のニンジンは無理ですね。カワカミさん宜しければ食べてもらえますか？」
「へっ!?」
「ああ、クレープを持ってくれているのに食べ難いですよね。では失礼して……あーん」
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙうまむすこｌｐ」
まさかの展開にカワカミプリンセスはお姫様らしからぬ雄叫びを上げた。
一方のトレーナーはそんなカワカミプリンセスの奇行には慣れっこなので、微笑みを崩さずにニンジンを彼女の口元へと運んでいる。
「どうぞ、お姫様」
「は、はひ……あむっ♡」
ぼりぼりぼりぼり、と甘い雰囲気に場違いな音が響いた。
「どう？」
「お、おいひぃでふわ……♡」
「うん、良かったです。まだまだありますからね……はい、あーん」
「あ、あーん♡」
一度されてみるといつものニンジンより何千倍も甘く感じ、カワカミプリンセスは餌を待つひな鳥のようにトレーナーからニンジンを食べさせてもらうのだった。
◇
クレープを食べ終え、時間もそろそろ寮の門限が近づいている。
カワカミプリンセスはまさに夢見心地で、トレーナーの隣を歩いて

は、それで揺れるのとは別で尻尾がご機嫌に揺れていた。
「いやぁ、美味しかったですねぇ」
「は、はい……とっても……♡」
「また行きましょうね」
「はい……是非……♡」
「私、（甘い物が）とっても好きなんですよ」
「はい……ふぇ？」
「（甘い物が）好きなんです」
　トレーナーにそんな意図はない。
　しかし恋する乙女が誤解するには十分過ぎる。
「……と、トレーナーさんも？」
「はい。（甘い物が）大好きです」
「ぎょえぇぇぇぇっ!!!!」
「ど、どうしました？」
「だだ、だってトレーナーさんがっ！」
「あれ、意外ですか？　前から（甘い物が）好きなのは知っていると思っていたのですが……」
「ししし、知るわけありませんわ！」
「なら今日知ったということで♪」
　いたずらっぽくウインクして言うトレーナーに、カワカミプリンセスはフライング・ニーを受けたような衝撃を受けた。
　しかしここまで言われたら、お姫様たる自分も覚悟を決めるしかない。
「と、トレーナーさんっ！」
「はい？」
「わ、私も、（トレーナーさんが）大好きですっ！」
「わぁ、嬉しいです」
「ほ、本当、ですの？」
「はい。カワカミさんと同じだなんて本当に嬉しいです。これから色んなところに（甘い物を食べに）行きましょうね♪」
「っ……はい……はいっ！♡　一生ついていきますわ！　愛していま

す、トレーナーさんっ！♡」
「ん？」
「どうしました？」
「いや、ちょっとベクトルが違うと思いまして……」
「そうですか？」
違和感を覚えたトレーナーと不安そうに耳が垂れるカワカミプリンセス。
その時、トレーナーに電流が走る――

やってしまった……

――と。
主語を抜いてしまっていたことで生じた誤解。
自分は甘い物に対して好きだと言ったが、カワカミプリンセスはそうじゃない。
前々から彼女の好意に気づいてはいたし、自分も彼女のようなパワフルなところに惹かれていた。
しかし彼女は学生で、自分は社会人。ウマ娘とその担当トレーナーが付き合うことは世間でも至極当然のように有り得ることではあるが、彼は父に幼い頃から耳にタコが出来るほど言われていた――

『ウマ娘に愛を伝えたら、それは一生もんだ』

――だから生半可な気持ちで告げるな、と。
なのに自分は誤解させるようなことをしてしまった。
ウマ娘という生き物は一度絆を結んでしまえば、余程のことが起きない限り離れない。

トレーナーは思わず天を仰いだ。
「トレーナーさん……？」
不安そうに耳を垂らし、今にも涙が零れ落ちそうに、自分のことを呼ぶカワカミプリンセス。
トレーナーは『ああ、彼女にこんな顔をさせてはいけない』と思い、すぐにカワカミプリンセスの前に片膝を突いて彼女の左手を取った。
「カワカミプリンセス」
「は、はい……」
「私が先程、好きだと言ったのは甘い物に対してです」
「……ふぇ？」
「誤解をさせて大変申し訳ありませんでした」
「そ、そんな……」
「だから、改めて言わせてください。カワカミプリンセス。あなたを異性として愛しています。あなたが卒業したら、私と結婚してください」
「……ぬぅ？」
思考停止するカワカミプリンセス。
しかしトレーナーに左手の薬指にキスをされた彼女は覚醒する。
「や、や……」
「カワカミさん？」
「やりましたわぁぁぁぁぁぁっ!!!!!
わぁぁぁぁぁっ!!!!」
ついに王子様ゲットです
っしゃー！おらー！と渾身のガッツポーズを見せるカワカミプリンセス。それはさながら登り龍の如き、鋭いアッパーカットだ。
その威力はボクシングヘビー級チャンピオンが放つアッパーを遥かに超えた破壊力。
トレーナーは愛バの右拳に顎を粉砕……される前に持ち前の反射神経で回避した。いや本能的な危機回避と言ったほうが正しいだろう。何しろ回避したと同時に掠った髪の毛が数本はらりと落ち、頬に扇風機強程度の風を受け、冷や汗を乾かしてくれたのだから。
「（自分の命があって）嬉しいです……」

「はい！　（トレーナーさんとお付き合い出来て）嬉しいですわ！♡
愛してますわ、トレーナーさんっ！♡」
　ガシリッとカワカミプリンセスに抱きつかれたトレーナーは
「くぇっ」と小さな悲鳴を上げて事切れた。
「や、やや、やっちまいましたわ！　トレーナーさんっ！　死なないでくださいいいいいっ！」
　カワカミプリンセスは急いでトレーナーを担ぎ寮へと搬送し、寮長フジキセキが特別に寮の応接室に寝かせ、学園の医師を呼んだ。
　幸い彼の柔軟性が良くどこも怪我はなかったが、カワカミプリンセスは大変反省し、彼にだけは優しく抱きつくと誓ったという。

キングは下を向かないわ！

『あなた……もういい加減になさい』
『いや！』
『離れなさいっ！』
『やぁぁぁん！』
幼いウマ娘が一向に少年から離れようとしないことにしびれを切らし、娘の母親は無理矢理引き離す。
少年は困りながらも、笑顔でそのウマ娘が泣き止むように首を優しく撫でた。
『ごめんね。こんな急に離れることになって……でも、必ず日本に帰ってくるから』
『……ぜったい？』
『うん。すぐには無理だけど、必ず戻ってくる』
『すぐじゃなきゃや！』
『うーん……すぐには戻れないかなぁ』
『やぁぁぁん！　わたしをおいてかないでぇぇぇっ！　このへっぽこぉぉぉっ！』
『次に会う時はへっぽこって言われないようにするよ』
少年がそう言うと、背後に立つ両親に肩を叩かれる。
時間だ、と。
『それじゃあ、またね』
『しらないっ！』
こうして少年はウマ娘の少女とその母親に背を向け、両親と共にアメリカ行きの飛行機へと乗り込むのだった。

――――――――――――――――

『到着便のご案内を致します。ニューヨーク――』
羽田空港の国際線ターミナルに、小規模だが報道陣が集まる。

理由は本日帰国する日本人を報道するためだ。
その日本人とは――――
「○○さん！　おかえりなさい！」
「宜しければ是非ともインタビューを！」
――――アメリカで４年間だがアスリートウマ娘のトレーナーをしてきた男。
彼は１２歳の頃に父親の転勤でアメリカへ渡った。
父親は日本でも有名な敏腕トレーナーであったため、その腕を見込まれアメリカのアスリートウマ娘専門の名門スクールへ引き抜かれ、それに伴う渡米である。
父の厳しくも熱心な指導により、トレーナー本人も１８歳という若さでその才能を開花。
アメリカのレースで既に勝利させたウマ娘の人数は二桁になる。
但しＧＩへの挑戦は未だ未経験。
しかし海外で実績を上げてきた期待の新星が帰国してその腕を日本のウマ娘に振るうのだから、メディアや関係者たちからの期待は高くなる。
「もうお目当てのウマ娘はいるんですか!?」
乙名史悦子が興奮気味で質問すると、彼は初めて足を止める。
四方向からマイクを向けられると、
「それは１０年前から決まってますんで」
微笑んで返し、颯爽と報道陣らを置き去りに空港をあとにした。

トレーナーがその足で向かったのはトレセン学園。
日本のトレーナーライセンスは既に取得済みで、今日は理事長との顔合わせがある。
「お待ちしていました、○○トレーナーさん。私は理事長の秘書を務めます、駿川たづなです。これから宜しくお願いします」
「ご丁寧にありがとうございます。こちらこそ宜しくお願いします」
互いに挨拶を済ませ、トレーナーは駿川から道すがらトレセン学園の説明を受けた。

そうしていると、トレセン学園の生徒たちが続々と何処かへ向かう様子が見える。
トレーナーはそれを気になって見ていると、駿川は小さく微笑んで「ご覧になりますか？」と訊ねた。
◇
今日はウマ娘がトレーナー陣へ向けて己の実力をアピールするための大切な模擬レース。
芝中距離２２００メートル。
「今日のレースは訳あって担当トレーナーさんとトゥインクルシリーズのシーズン途中に契約解消をしてしまった子たちが出走する模擬レースです」
「……なるほど」
ウマ娘はトレーナーが付いて初めてアスリートウマ娘としてのスタートラインに立てるが、その関係が続かないことも時にはある。
故にそうなった子たちは再びトレーナー陣へアピールしなくてはならない。
「今回の注目はキングヘイローさんに集まってますね。ただ彼女は菊花賞のあとで担当トレーナーさんと意見が合わず、契約解消に至ってしまったので……」
「……そうですか」
そんな話しをしている内に、レースが始まった。
◇
「はぁ……はぁ……はぁ……っ！」
１２人中１０着という結果に終わったキングヘイロー。
しかし彼女は決して下を向かない。何故なら自分は一流のウマ娘で、その名にある通りキングは下を向かないからだ。
ただ、彼女へ声を掛けようとするトレーナーは誰一人としていなかった。
そこへ――
「相変わらず負けず嫌いだな、グーちゃん」
――トレセン学園へやってきたばかりのトレーナーが愉快そう

に彼女へ声を掛ける。
グーちゃん……それはキングヘイローにとって特別な、たった一人の大切な人にしか呼ばせない愛称。
「……え」
「久しぶり。遅くなったけど、帰ってきた。一流になって」
「にいに……？」
思い出の中の彼とは声も背格好もかなり変わってしまったが、確かに雰囲気と匂いは思い出の中の彼だった。
「俺以外のヤツと担当契約なんかしたから解消になっちまうんだ……ってことで、今日から俺が担当になってもいいよな？」
「あ……」
あの頃と同じ、かたえくぼの笑顔。
そんな彼にキングヘイローは――
「……帰ってくるのが遅過ぎるのよ、このへっぽこぉぉぉっ！」
――泣きながら叫び、大好きな男の胸に飛び込んだ。

◇

そんな運命的な再会から月日が経ち、キングヘイローは今や超が付く一流ウマ娘となった。
高松宮記念、安田記念、天皇賞秋、有馬記念とＧＩを制し、その名を轟かせた。
中距離路線から急な短距離マイル路線への変更。それだけでも無謀だというのに、そのまま中長距離も制したことで誰もが彼女とそのトレーナーを一流だと認める他なかったし、彼女の元トレーナーも彼女たちの成功にとても喜んだ。
そんな順風満帆のキングヘイローだが、
「……」
今にも泣きそうな顔をして噴水近くのベンチに腰を下ろし、空を見上げている。
理由は自分が不甲斐ないから。
「……はぁ」
重たいため息を吐き、彼女は先程のことを思い浮かべる。

◆

それはキングヘイローがスペシャルウィークやセイウンスカイといった、いつもの仲良しメンバーでカフェテリアにて食事をしていた時のこと。

みんなでそれぞれ食事をしていると、各々の担当トレーナーたちも食事をしにカフェテリアへとやってきた。

キングヘイローは勿論、他のメンバーもお昼休みに自分のトレーナーに会えたことを喜び、同じテーブルに誘う。

皆が皆カフェテリアで食べたい物を頼んで座る中、キングヘイローのトレーナーだけはお弁当を持参してきた。

作ったのは当然、キングヘイロー。

彼女は自分が愛して止まない、自分をオンナとして一生愛する権利を与えたトレーナーにこうして毎日お弁当を作り、毎朝渡している。それは学園が休みである休日でも。

「キングとそのトレーナーさんは本当に仲良しデース！」

「一流のウマ娘は愛も一流ですなぁ♪」

「キングちゃん凄い！」

「微笑ましいですね」

エルコンドルパサーを始め、友達らに生温かい視線と言葉をぶつけられるキングヘイロー。

当然、トレーナー陣も彼女のトレーナーにやじを飛ばす。

キングヘイローのトレーナーが照れ笑いしながらそのお弁当箱の蓋を開けると――

『……』

――まるで時が止まったかのように誰もが沈黙し、その場の空気が凍りついた。

何故ならお弁当の中身が控えめに言って凄惨な状況だからだ。

先ず目に飛び込んで来るのは白飯。それはいい。しかしおかずが問題で、

「……あの、丸焦げの黒い棒は何なんデスか？」

「ソーセージよ？　ちょっと焦げちゃったけど、カリカリベーコンが

あるんだもの、あれだって平気よ」
「あの真っ黒なボール状のは？」
「鶏の唐揚げね。黒い唐揚げのレシピを見つけたから作ってみたの」
「ご飯の上に乗ってる黒いのは……海苔の粉末、とか？」
「いいえ、あれはたらこを炒ったやつ。どれくらい炒ればいいかレシピに載ってなかったから、色が変わるまでやったわ」
「スクランブルエッグだけは完璧ですね……」
「玉子焼きは得意なの♪」
スクランブルエッグ以外がほぼ黒いからだ。
これには流石のセイウンスカイも茶化せず、ただただ口をあんぐりと開ける。
そして最も皆が驚いたのは、
「いやぁ、今日も美味そうだ！」
トレーナーのこの発言であった。
他のトレーナーたちやエルコンドルパサーたちは、どう見てもそれが食べていい物体に見えない。
あの食欲旺盛なスペシャルウィークですら、箸が止まっている。
なのにキングヘイローのトレーナーは満面の笑みでソレを食べ始めた。
ガリガリ、ボリボリ、バキバキ……と、豪快な咀嚼音が皆の耳にこだまする。
「ね、ねぇ、味はどう？」
不安そうに訊ねるキングヘイロー。
「？　めっちゃ美味いよ！　中でもやっぱグーちゃんの玉子焼きが一番好きだな！　このぺちゃっとしてる中にまたに卵の殻のカリカリがある食感は誰にも真似出来ないだろ！」
「そ、そう……まあ当然よね！　このキングのお弁当なんだもの！有り難く完食する権利をあげるわ！」
トレーナーの返答にキングヘイローはいつもの自信たっぷりスマイルを浮かべる。
しかし、

「試しに俺も貰っていい？」
「おう、いいぞ。いいよな、グーちゃん？」
「ええ、構わないわ！」
スペシャルウィークのトレーナーが興味本位に黒い唐揚げを食べた途端、顔を青くしてトイレへ駆け込み、キングヘイローはそれを見て初めて自分の料理の下手さを自覚したのだった。
◇
そういう訳で、キングヘイローは絶不調。
あれだけ美味しい美味しいと愛するトレーナーが食べていたモノは、とても人に食べさせていい代物ではなかった。
自分は料理が上手くなったと錯覚していただけだったのだ。
「探したぞ、グーちゃん」
「……なんで来たのよ……」
そこへトレーナーがやってくる。
「なんでって……別れ際のグーちゃんが泣きそうな顔をしてたから」
「別にそんなことないわよ！」
「嘘だね。グーちゃんは泣きそうになるといつも上を向く癖がある。俺にはお見通しだぞ？」
「……知らないわよ、ふんっ」
プイッとそっぽを向くキングヘイロー。
しかしそこまで自分のことを分かってくれていることは嬉しいので、耳は控えめにくるんくるんと回っている。
「俺は本当に美味しいと思ってる」
「……あんなことがあったのに？」
「それはアイツが一流じゃないから」
「スペシャルウィークさんはダービーも取ったし、ジャパンカップも取った。それはあのトレーナーが付いてたからじゃない？」
「グーちゃんには勝てないね！　なんたって俺の愛バだし！」
「……ねぇ、にぃには本当にお腹とか壊したりしてない？」
「え？　めっちゃ健康だぞ？　この前も健康診断は何も見つからなかったからな」

「……じゃあ、舌がバカなの？」
「んなことあるか」
だってそれ以外に有り得ない。とキングヘイローは言った。
するとトレーナーは彼女を優しく抱きしめる。
「ちょ、今はこんなことするような感じじゃ――――」
「俺にとって、グーちゃんがくれる物は全部宝物なんだ。それが例え毒であっても」
「今毒って言ったわね」
「例えばって言ったろ。俺はグーちゃんが俺への愛をこれでもかと詰め込んでくれた料理が大好物なんだ」
背中をポンポンされ、鼓膜を彼の声で優しく撫でられると、キングヘイローはトロ顔になりながらも「……おバカ」と反論する。
「なんとでも言え。そもそも小さい頃のグーちゃんの料理に比べたら格段に美味くなったのは事実だぞ。小さい頃、茹でてない乾燥麺に生クリームとクリームチーズと切ってないベーコンで生パスタのカルボナーラって言われたあの衝撃は今でも覚えてるぞ」
「あ、あれは……幼かったし、料理の知識もなかったからで」
「あれを食って以来、何を食っても平気になった」
「……ごめんなさい」
「別に責めてるんじゃない。あの頃から俺は、グーちゃんの為ならなんだってやるって誓った。一生懸命俺のためを思って作ってくれたし、俺が完食したらとっても可愛い笑顔を見せてくれたのを今でも覚えてる」
そう、あの時に彼が自分のお世辞にもヒトが食べていい物とは言えない料理を食べてくれたから、キングヘイローは料理を頑張ろうと思った。
結局のところ人に振る舞えるのはたまに殻が入ってしまう玉子焼きくらいであるが、着実に進歩はしてきている。
だからこそ、トレーナーは彼女の手料理を残さず食べるのだ。
「……このキングに料理を教える権利をあげるわ」
「お、いいね。お揃いのエプロンして、キッチンにグーちゃんと立つ

の」
「にいにだから、特別なんだからね？」
「俺にとって、グーちゃんはずっと特別なんだが？」
「……知ってるわよ、ふんだ♡」
　それから一週間後、キングヘイローがトレーナーと共にホットケーキを作ってスペシャルウィークのトレーナーにお詫びをしたし、そのホットケーキはくそ甘かったという。

トレーナーさんとイチャイチャしたいデス！

昼休み。
悩めるウマ娘、エルコンドルパサーは途方に暮れる。
彼女は今、困難という壁にぶち当たっているのだ。
それは――――
「料理が上手くならないデース……」
――――料理スキルの改善だ。
流石に友達であるキングヘイローのように殺人的不味さの品を作ることはないが、自分が自信を持って作れる料理と言えばどれも激辛料理。
単にそういった辛さを加えることをしなければいいのでは？と思われるだろうが、辛さを抜くと他の美味しさも抜けてしまうというのが悩みの種なのだ。
「エルちゃん、大丈夫？」
「エルの料理指南は私でも難しいですからね……」
そんな彼女を心配するのは普段から仲良しのスペシャルウィークとグラスワンダー。
因みにいつも一緒にいることが多いセイウンスカイは自分のトレーナーがいるトレーナー室へ昼寝しに行き、キングヘイローは彼女たちから噴水を挟んで向かい側にあるベンチで自分のトレーナーに抱きしめられている。
実は先程キングヘイローが泣きそうになっていたのを三人は心配して様子を見に来たものの、もうそんな心配は無くなった。
そしてキングヘイローの料理スキルの話題となり、エルコンドルパサーは自分も料理は苦手だということを思い出したのだ。
「はぁ……エルも自分のトレーナーさんに愛バ弁当をプレゼントしてもっとエルに夢中になってもらいたいデース……」
エルコンドルパサーは自分のトレーナーと付き合っていて、プロレス（健全）をするまでの仲良し度。

しかし彼女もアスリートとは言えお年頃の女学生。恋人らしいイチャイチャもしたいのだ。
「慎ましやかに愛を育むのが一番ですよ、エル？」
「でもエルちゃんの気持ち分かるよ！　私もトレーナーさんと手を繋いで歩いたり、食べ歩きしてあーんしたりされたりしたいもん！　グラスちゃんもそう思わない？」
「わ、私は……まあ否定はしません……」
ポッと頬を桜色に染めて恥ずかしそうに返すグラスワンダー。
それとは打って変わって、エルコンドルパサーは相変わらず顔色が良くない。
因みにキングヘイローのお弁当の味見をしたスペシャルウィークのトレーナーは胃薬を服用して無事である。
「ふっふっふー♪　ここはセイちゃんが一計を授けてしんぜましょうかー？」
そこへセイウンスカイが皆の前ににゅっと顔を出してきた。
「あれ、セイちゃん？　お昼寝はもういいの？」
「またトレーナーさんに寝顔が可愛いと言われて逃げて来たのですか？」
「にゃ、にゃはは～、何を言ってますやらグラスさんや、セイちゃんは逃げてましぇんとも～……」
明らかに動揺の色が隠せないセイウンスカイにグラスワンダーはフッと鼻で笑う。
「そんなことより、今はエルちゃんの方が先決でしょ？　ね？」
強引に話題を切り替えたので、グラスワンダーは「そうですね」と差し切り体勢を止めた。流石は乗り換え上手である。
「でも具体的にはどうするの、セイちゃん？」
「そんなの簡単だよ、スペちゃん。出来る人に教わればいいんだよ～。おーい、そこのトレーナーさーん」
セイウンスカイはあるトレーナーを呼んだ。
それはスーパークリークのトレーナーだった。
「スーパークリーク先輩に用事があるんで、呼んでもらえませんかー

？」
「ああ、分かった。今呼ぶ」
スパークリークのトレーナーは快く頷くと、その場に寝転がって「おぎゃーおんぎゃー！」と本気で喚き出す。
その数秒後――――
「はぁい、トレーナーさぁん♡　ママでちゅよ～♡　ちゃんとママのこと呼べていい子でちゅね～♡」
――おしゃぶりを持ったスパークリークがトレーナーを抱き上げてあやし始めた。
大の大人が……それもファンの間ではイケメンだと言われている彼女のトレーナーがおしゃぶりを咥えて、あやされている。
誰もが目を疑う光景だが、トレセン学園の中にいる者たちにとってはいつもの光景だ。
「ちゅぱちゅぱ……クリーク、そこの子たちが君に用事があるそうだ」
一心不乱におしゃぶりを吸っているかと思いきや、突然おしゃぶりをしたままキリッとした顔に戻して本題を述べるトレーナー。
オンオフの様子が異質過ぎるものの、もう既に吹っ切れているトレーナーは強い。
「あら、そうなんですねぇ。私に何かご用ですかぁ？」
トレーナーを抱っこしたまま、エルコンドルパサーたちの方に向き直って訊ねてくるスパークリーク。
「エルちゃんにお料理教えてあげてください♪」
セイウンスカイがそう頼めば、エルコンドルパサーは頭を下げる。
当然、スパークリークは二つ返事でそれを了承すると、夜にエルコンドルパサーが暮らす美浦寮に行くことを約束し、トレーナーを抱えたまま校舎へと消えていった。
「スパークリークさんとそのトレーナーさんっていつも仲良しデスネ！」
「……闇が深過ぎる気もしますけど」
「まあまあ、愛の形はヒトそれぞれ～。とにかく、これでエルちゃんの問題は前進したってことで♪」

「エル、頑張りマス！　愛するトレーナーさんのために！」
「頑張ってね、エルちゃん！　味見なら私に任せて！」
こうしてエルコンドルパサーはやる気満々でその時を待つのだった。

◇

その日の夜。
スーパークリークはちゃんとフジキセキに外出届けを提出してから、美浦寮へとやって来た。
寮の厨房にはエルコンドルパサーだけではなく、彼女を心配してグラスワンダーもいる。
因みに味見役として行く気満々だったスペシャルウィークはサイレンススズカに「次、補習だったら大変よ？」と言われたことで諦めたそう。
「エルコンドルパサーちゃんは今までお料理をしたことはありますか？」
「アタシのことはエルで構いマセン！　料理は少しは出来マス！」
「エルの場合は、辛党なのでいつも独断により辛さを追求してしまって、とても彼女のトレーナーさんへ食べさせられる物にならないのが悩みなんですよ。また辛さを抜くとどういう訳か、仕上がりが残念な結果になります。全体的に味が薄くなってしまうんです」
グラスワンダーが丁寧に補足すると、スーパークリークは「そうなんですねぇ」とにこやかに頷き、持ってきたレシピ本をパラパラと捲り始めた。
使い込まれているのがひと目で分かるレシピ本。様々なページにはスーパークリーク自ら書き込んだメモがあり、その全ては自身のトレーナーが好む味付けや仕上がり加減だ。
それを見ただけでエルコンドルパサーは『これがママ神のラブパワー……』と固唾を飲む。
「では実際に作っていきましょうか。私の言う通りの分量で作ってくださいね。悪いところはちゃんとその都度伝えますから。頑張りましょうね、エルちゃん」

「よろしくお願いシマス！」
「頑張ってくださいね、エル」
こうしてエルコンドルパサーの料理特訓が始まった。
流石に一日二日で上達するのは無理だったものの、エルコンドルパサーは愛するトレーナーのことを思い、一生懸命にスーパークリークからのアドバイスに耳を傾けた。
彼女が素直で純粋なのもあり、一週間もすれば辛味を抜いても味付けがちゃんと出来るように成長するのだった。
◇
スーパークリークからの料理特訓が終わり、エルコンドルパサーはとうとう自分のトレーナーへ愛バ弁当をご馳走する時を迎える。
場所は二人きりで過ごせる彼のトレーナー室。
意気揚々とトレーナー室へ入って行ったエルコンドルパサーだったが――
「まったくお前は……なんだってそう俺のとこに来るんだ？」
「ピィーピィーピィー♪」
――まさかの先客がいた。
それはエルコンドルパサーが周りに内緒で飼っているコンドル（鷹）のマンボ。
マンボはオスで普段は自由気ままに学園内を飛び回っているが、エルコンドルパサーがトゥインクルシリーズを終える頃にはトレーナー室にいることが増えた。
何故ならマンボがトレーナーのことを気に入っているから。
その証拠にマンボはたまに鳴きながら、ずっとトレーナーの膝上や肩に乗って、彼の耳やら鼻やら髪の毛やらをくちばしで啄んでいる。
勿論軽くなので痛くはないが、これはマンボなりのコミュニケーション。
「マンボ！　トレーナーさんから離れるデース！　トレーナーさんはアタシのデース！」
エルコンドルパサーはマンボへそう言うものの、マンボは彼女の方へ一度視線を向けただけで、そのあとはすぐにトレーナーの方へと視

線を戻してしまう。
「ほら、マンボ。飼い主の言うことを聞け。飯抜きにされると困るだろ？」
「ピィーピィー！」
「いや、鳴きながら俺の頬をつつくな。うわっ、んんっん!?」
「マンボー！」
エルコンドルパサーは即座にマンボをトレーナーから引っぺがし、窓の外へと放り投げた。
優雅に飛び立つマンボだが、すぐにまた窓辺に止まり、トレーナー室へと降り立つ。
エルコンドルパサーがマンボを放り投げたのは、マンボがトレーナーの唇を啄んばかりだ。
そこに触れていいのは自分だけ。故にエルコンドルパサーは怒ったのである。
しかしマンボは何食わぬ顔でまたトレーナーの肩に戻ってきた。
「マ～ン～ボ～……トレーナーさんはアタシのデース！」
「キィー！　キィー！」
「むむむっ！　人を見る目は認めマス……ガ！　トレーナーさんはアタシの番（つがい）なんデース！　邪魔しないでー！」
「耳元で怒鳴り合わないでくれ……」
トレーナーの注意も虚しく、エルコンドルパサーとマンボは数分間も口論（？）を続けるのだった。
◇
「……あ～、まだ耳がキンキンする」
「ゴ、ゴメンナサイデス……」
一頻り主人と戯れて満足したのか、マンボは上機嫌にトレーナー室から飛び去った。
しかしトレーナーは耳を押さえて眉をしかめている。
「まあ今に始まったことじゃないしいいさ。マンボがやんちゃなのは飼い主譲りだし」
「あぅぅ……」

「で、昼休みに用事があるって連絡は受けたけど、何かトレーニングのことで相談か？」
「あ、え、えっと……」
トレーナーの言葉でやっと本来の目的を思い出したエルコンドルパサー。
しかしいざそうなってみると、変に緊張してしまって口籠ってしまう。
「言い辛いことなのか？」
「あ、あい……あいあい……」
「おさーるさーんだよー？」
「あ、ああ、愛バ弁当を作って来マシター！」
「……Ｏｈ、また耳にダイレクトアタックを……」
「ゴ、ゴメンナサイデス！」
突然の大声にまたも耳が痛くなるトレーナー。
エルコンドルパサーはなんとかして彼に謝意を伝えたくて――
「はむっ、ちゅっ……ちゅぱっ、れろれろ……」
――彼の左耳を優しく舐め始めた。
「うぉっ!?　何すんだよ!?」
「えっと、その……舐めたら癒えるカナって？」
「んなことしなくていい！」
「……でも、トレーナーさんの鼓動の音、激しいデスヨ？」
「そりゃ、彼女からいきなり耳舐められたら驚くだろ！」
「あぅぅ、ゴメンナサイデース……」
「……はぁ。で、愛バ弁当食わせてもらえるのか？」
「あっ、はい！　勿論デスヨ！　クリーク師匠に教わって、グラスやスペちゃんからも合格を貰えました！」
「エルの手料理を食わせたのか？　俺以外のやつに？」
「……♡」
トレーナーが見せた唐突な独占欲に、エルコンドルパサーは思わず背筋がゾクゾクとする。
彼は普段余裕のある大人に見えて、彼女へ対する愛情はかなり強

く、それがエルコンドルパサーを虜にしているのだ。
「ほ、本番は今からデスヨ？♡」
「そうか。可愛いエルのことになるとつい本音が出ちまう」
「デヘヘ……エル、幸せデ～ス♡」
「にしても、エルにしては珍しく、素直にイチャイチャしたいって伝えてきたな」
「ケッ!?　何故それを!?」
「愛バ弁当を作る。俺とイチャイチャする口実が出来る。相変わらず回りくどいけど、可愛いから良し！」
「～～～っ♡」
　素早くトレードマークのマスクを外され、両手で頬を優しく包み込まれ、愛情深く囁かれるエルコンドルパサー。
　既に彼女の瞳はトレーナーのことしか映っておらず、ハートマークが浮かんでいる。
「愛してるよ、エル。さあ、エルの愛バ弁当を食わせてくれ」
「は、はい……でも、その前にアタシもマンボみたいにトレーナーさんの唇を啄んでいいデスカ？♡」
「マンボばっかりずるい？　でもあいつはオスだろ？」
「分かってるくせにぃ……イジワルしちゃやぁデスゥ♡」
「ごめんごめん。食前にエルが俺の唇を味わうなら、食後はエルの唇を味わっていいってことだよな？」
「……♡」
　エルコンドルパサーは小さく、しかししっかりとトレーナーの目を見て頷いた。
　するとトレーナーは微笑み、エルコンドルパサーはゆっくりと愛するトレーナーの唇を啄むのだった。
　当然、お弁当の味も申し分なく、明日はトレーナーがお礼にお弁当を作ると約束してくれた。
　その後、教室に戻ってきたエルコンドルパサーはフニャフニャになっていたので、グラスワンダーから友として背中に喝を入れられたという。

こんなことしてる場合じゃないんです

ある日の昼。
今日はレースもトレーニングも無くお休みとなったスーパークリークは、普段から仲の良いタマモクロスとオグリキャップが過ごす部屋にお邪魔していた。
そこへイナリワンも加え、いつもの仲良しメンバーで今日はたこ焼きパーティをしているのだ。
タマモクロスたちも今日は予定が空いていたので、少し前から今日の計画を練っていたのである。
因みに材料費は全て割り勘だが、オグリキャップのみ追加で自分が食べる用の材料を用意済。
「この日のためにウマ印の大型炊飯器をカフェテリアで借りてきた」
テーブルの横に堂々と鎮座する十升炊きの炊飯器は既に炊き上がり、保温モードに入っていた。
「オグリは分かっとるなぁ。おっと、イナリとクリークはこっちの炊飯ジャーの方を好きに食ってええで。米は奢りや」
タマモクロスはそう言って普通の五合炊き炊飯器をペシペシと叩く。
対してイナリワンもスーパークリークも特にたこ焼きをおかずに米を食べる習慣がないので、たこ焼きのみを楽しむ所存。
「ほな焼いてくで！」
「タマ公がいりゃあポンポン焼き上がるから楽でいいねぇ！」
「イナリも手伝えやボケぇ！」
「あたしがやるとてめぇが口うるさくしゃしゃり出てくるだろ！」
「油注いで揚げだこにしようすんのが悪いんや！」
きゃいきゃいと口論しつつも、タマモクロスの手は見事なまでにたこ焼きを焼き上げているし、イナリワンは皿に乗せられるたこ焼きにソース・青のり・マヨネーズ・鰹節とトッピングしていく。
なんだかんだ二人の友情コンビネーションは天下一品なのだ。

「美味いっ！」
　そしてオグリキャップはイナリワンがトッピングし終わると同時にそれを口に運び、丼飯を掻き込む。
　傍から見ればたこ焼きパーティではなくオグリキャップのたこ焼き大食いチャレンジ状態だが、今に始まったことでもないのでツッコミは入らない。
　そもそもオグリキャップも他のみんなが食べられるようにセーブしているし、今日は既に底入れとして自分のトレーナーお手製のおにぎり（三合飯）を３つ１０時のおやつに食べてきている。
「……」
　ただそんな和気あいあいとしているパーティの最中、未だ何も口を開かずにいる者が。
　それはスーパークリーク。いつもの彼女ならば何かと世話を焼いてタマモクロスやイナリワンに食べさせたり、オグリキャップの丼にご飯を盛ったりしているのに、本当に今日は何も手につかないと言った様子。
　目の前にあるたこ焼きにも手をつけておらず、
「……なあ、場が盛り下がるさかい、辛気臭い顔すんなや」
　とうとうタマモクロスがその手を止めてスーパークリークに詰め寄った。
「あ……ごめんなさい」
「謝られても困る」
「おうおう、クリーク。いつものおめえさんにしてはおかしいだろ。こっちの調子狂う。なんか心配事でもあんのかい？」
　しょんぼりと耳を垂らすスーパークリークにイナリワンが優しい声色で訊ねる。
　するとスーパークリークはぽつぽつと理由を話し始めた。
「実は今日、私のトレーナーさんもお休みなんです」
「そらクリークが休みなんやからそのトレーナーも休みやろ」
「はい。なので本当なら私がお世話したかったんです。ですが、今日は先約があると断られてしまって……」

「ほーかほーか……ってなんでそれだけでそこまで沈んどんねん！」
　タマモクロスの渾身のツッコミが炸裂するが、イナリワンが冷静に
「まあ、待てよタマ公。なんか訳ありってニオイがする」と宥め、スーパークリークを促す。
「その先約ってぇのはなんだったんだよ？」
「それが……トレーナーさんの実のお姉さんのお子さんを今日から連休最終日まで面倒を見るんだそうです……」
「は？」
「あん？」
　タマモクロスもイナリワンも首を傾げてしまった。何故ならもっと深刻なことなのかと思っていたから。
　そもそもスーパークリークとそのトレーナーはお互いを甘やかす存在。
　故に彼女のトゥインクルシリーズが終わったと同時に、どちらが言うまでもなく当然のように恋仲になっていた。
　スーパークリークの彼に対する溺愛加減は尋常ではなく、誰もが憧れるカップルであり、誰もがこうなってはいけないと畏怖するカップルなのだ。
「クリークは自分のトレーナーのことがとても好きだからな。だからトレーナー一人で親戚の子どもの面倒を見ると言われたのがショックなんだろう」
　黙々とたこ焼き丼を食べていてもちゃんとスーパークリークの話は聞いていたオグリキャップがそう言うと、タマモクロスとイナリワンは『ああ』と納得がいった。
　トレーナーなら頼ってくれると思っていたスーパークリーク。なのに彼は自分を頼らなかった。だからこそ気持ちが沈んでいるのだ。
「せやけどなぁ、親戚の子おにまであのベイビーモードは見せたないやろ」
「だなぁ。あたしらは見慣れてるからいいっちゃいいが、傍から見りゃやべえもんなぁ。しかも親戚の子どもとなると……。というか、タマ公、ビーストモードみたいな言い方はやめろい」

「私は二人が仲良しで見ていて微笑ましいぞ？」
「おかしいわっ！」
「異常でえいっ！」
　オグリキャップに高速でツッコミを入れるタマモクロスとイナリワン。
「こほん……なあ、クリークよぉ。別にトレーナーはお前さんを頼りにしてない訳じゃぁねぇと思うんだ。そもそもクリークはあたしらとたこパするってぇのはあちらさんも知ってたんだろ？」
「はい」
「ならクリークのことを考えてそうしたってこったろ。そんなにショックなら明日にでもお世話しに行きゃあいい。お前さんは頼まれてなくても押し掛けるだろう？」
「……でも、私……こんな気持ち初めてで……」
　スーパークリークの言う『こんな気持ち』がいまいち掴めず、タマモクロスが「こんな気持ちぃ？」と訊き返すと、
「私、その親戚のお子さんに嫉妬してるんです……トレーナーさんを取られてしまったみたいで……」
　なんて言うものだからこれにはイナリワン共々あんぐりと口を開けてしまった。
　一度そのことを吐露すると、スーパークリークのオーラは徐々に湿度を高めていく。
「愛するトレーナーさんが親戚のお子さんとはいえ、面倒を見ているんです。なのに私はそれを褒めてあげられないし、労ってもあげられない。トレーナーさんがその子を褒めたりしたら、それが良かったことだと誰が褒めてあげるの？　ご飯をその子に食べさせてあげて疲れたトレーナーさんに、誰がご飯を食べさせてあげるの？　私がいればそう出来るのに……」
　湿度マシマシで眼差しも光りを失うスーパークリークは、ブツブツとつぶやきながらエアなでなでしたり、エアあーんをしたりと末期症状が出始める。
　タマモクロスとイナリワンは『これはまずい』と戦慄した。

何故ならそのエア甘やかしが最終段階に達すれば、エアではなくターゲットが自分たちになるからだ。
どうやってそれを回避しようかと有馬記念さながらの思案を巡らせていると、
「すまない。楽しんでいるところ申し訳ないが、寮内に匂いが充満している。中止にしろとまでは言わないが、もっとしっかりと換気をしてはもらえないだろうか」
「ごめんよ、ポニーちゃんたち。でもこのままだと寮中にたこ焼きの匂いが染み込んでしまうからね」
エアグルーヴと寮長フジキセキが注意をしに部屋へやって来た。
タマモクロスとイナリワンは『助かった！』と思う。
「あ、ああ！　悪かったなぁ！　今、窓全開にするわ！」
「それより大変なんでい！　お二人さん、あたしらを助けると思って、ちったぁ話を聞いちゃぁくれねぇかい!?」
『？』
エアグルーヴたちは首を傾げながらも、イナリワンに手を引かれて入室し、たこ焼きを出され、スーパークリークのことを聞かされる。
フジキセキは「なるほどね」とスーパークリークの乙女らしい悩みに微笑むが、
「たわけが。そんなつまらんことで友の心を掻き乱すな」
エアグルーヴは一喝した、
当然だ。エアグルーヴもスーパークリーク程ではないにしても、自分の担当トレーナーを好ましく思っている。ならば好いた男へ女がしてやるべきことは一つ――
「今からトレーナー宅に行って世話を焼きに行けば解決するだろう。貴様は普段からそうしているのに、何故それをしない」
――好いた相手に手を抜くな。
そうエアグルーヴは一喝したのだ。
「エアグルーヴさん……」
「嫉妬がなんだ。嫉妬を自覚したのであれば、貴様なりのやり方で解消すればいいだけのことではないか。それに貴様のトレーナーはウ

マ娘の世話は慣れていても、子どもの面倒は慣れていないのだろう？
それを助けてやればいい」
エアグルーヴに言われ、スーパークリークの眼に光りが戻る。
戻ると彼女はすぐにその場から立ち上がり、魔王の如き速さで愛するトレーナーの元へ駆けて行った。
そんな彼女を見て、エアグルーヴは「たわけが」と優しい声色で見送る。
「エアグルーヴにしては珍しいね。君もそれくらい自分のトレーナーさんに素直だといいのに」
「余計なお世話だ」
「まあクリークはもう安心やな！　気ぃ取り直してたこパ再開や！
お礼に二人も食ってってや！」
「クリークが抜けたから食ってくんねぇ！」
「私はまだまだ余裕なのだが？」
「オグリはセーブモードでええねん！」
「二人はお客さんでえい！」
「むぅ……仕方ない」
こうして残されたタマモクロスたちは、窮地を救ってくれたエアグルーヴとフジキセキに美味しいたこ焼きをご馳走し、二人はそれを有り難く頂くのだった。
◇
「おいちゃん、おしてー！」
「はいはい。しっかり掴まってるんだぞ？」
「はーい！」
「それー！」
「きゃー☆」
トレーナーは姪っ子を連れて公園へとやって来ている。
姪っ子は人間の女の子で、４歳になる。トレーナーには良く懐いているのもあり、両親と離れても明るく遊ぶ。
そして今は大好きなブランコの真っ最中。
「もっとー！」

「ほいさ！」
「もっとー！」
「あらよ！」
「たかいたかーい♪」
「そうかそうか」
（元気だなぁ。でもこれ案外腰に来るんだよなぁ。責任持って面倒は見るけども……）
日頃のデスクワークで最近は腰痛気味のトレーナー。
なので子ども特有のパワフルさと、彼元来の面倒見の良さで程々に手を抜くというのが出来ない。
トレーナーが腰痛を我慢していると、
「トレーナーさん！」
「え、クリーク？　どうして……？」
スパークリークがトレーナーの匂いを辿って彼の元へと参上する。
トレーナーは心底驚いているが、対するスパークリークはいつも以上に眩い微笑みを浮かべていた。
「あー！　スパークリークだー！」
姪っ子はスパークリークの大ファン。
目の前に本物が現れたことで姪っ子はブランコの持ち手を離してしまった。
「きゃー！」
「危ないですよぉ？　お怪我はありませんかぁ？」
しかしスパークリークが持ち前の身体能力を発揮して、難なく姪っ子を抱き止める。
姪っ子は怖かったのと、大好きなスパークリークに抱っこされているのとで感情がぐちゃぐちゃになり、泣いてしまった。
それでもスパークリークは持ち前のあやしスキルで姪っ子を宥め、泣き止ませる。
「次からは手を離しちゃダメですよぉ？」
「はぁい……」

「うん、いい子いい子♪」
「えへへぇ♪」
　スパークリークに頭を撫でられ、ご機嫌になる姪っ子。
　トレーナーはそんな二人を見て、優しく微笑んだ。
「で、クリークはどうして俺たちのとこに？　今日ってタマモクロスたちと約束があったはずだが？」
「はい、そうなんですけど……私、トレーナーさんの……あなたのお側に居たいんです」
「……一緒に面倒見たくて仕方なかったってことでいいのか？」
「違います。確かに面倒を見たい気持ちもありますが、この子の面倒を見てるあなたを甘やかしたいんです。私はあなたの愛バですから」
「クリーク……」
　スパークリークは姪っ子を抱きかかえたまま、トレーナーのすぐ目の前まで距離を詰める。
「私、あなたのこと愛してるんです。ですから、私をどんな時でもお側に置いてください」
　そう言うと彼女は『お願いします』と乞うように、トレーナーへ口付けた。
「んっ……いいですよね？」
「こんなことまでされて断れる訳がない」
「んふふ♡　そういう優しいところ、大好きです♡」
　共に頬を赤く染めて笑い合っていると、
「おいちゃんとスパークリークけっこんするの？」
　一部始終をバッチリ見ていた姪っ子が純粋な気持ちで質問する。
　スパークリークは『やっちゃった』と反省したが、
「ああ、そうだよ。もう少し先になるけど、俺たちは結婚するんだ」
　トレーナーの返答にスパークリークは思わず息を呑んだ。
　つまり、今この瞬間、彼女はトレーナーからしっかりと気持ちを返してもらえたから。
「わぁ！　すごいすごーい！」
　対して姪っ子は大興奮。会えばいつも遊んでくれる大好きな人と、

とっても走るのが早くて大好きなウマ娘が結婚するのだから、姪っ子としては嬉しいことだらけだ。
「と、トレーナーさん……♡」
「嫌とは言わせないぞ？　俺をこんな男にした責任はきっちり取ってもらわないと」
「……はい♡」
「俺だってクリークが側にいないと寂しいからな」
「もう、離してあげませんからね……♡　ずっと一緒です♡　ずっと、ずうっと♡」
「ああ」
　こうしてスーパークリークは嫉妬心がすっかりと解消され、幸福感に包まれた。
　その後スーパークリークはフジキセキに連絡を入れ、連休中は外泊する旨を伝え、一足も二足も早い、家族生活を満喫したのだった。
　でも――
「あなたぁ、いい子いい子～♡」
「ばぶばぶ♪」
「愛してます、あなた♡」
「ああ、俺も愛している」
　――姪っ子が寝入ったあとで、うんとでちゅね遊び（新婚設定）もしていたという。
　大の大人が少し大人びた女子学生に赤ちゃんのように抱っこされたまま愛を囁き合うのはかなり異様な光景ではあるが、これが二人の愛の形なのだ。

女帝が聞いて呆れるな

「このたわけがぁぁぁぁぁっ!!!!」
練習コース場にとあるウマ娘の怒号が響く。
声の主は女帝エアグルーヴ。
彼女が叱責することはままある。
なので周りの人々は『またか』程度であるが、それを全身に受ける者は思わず身が縮む。
「貴様はどうしてそうなんだ！　何故学習しない！　何故同じ過ちを繰り返すんだ！」
「す、すみません……」
エアグルーヴに叱られているのは彼女のトレーナー。
今のエアグルーヴはトレーニングでコース場にいるのではなく、生徒会と美化委員合同の清掃活動のためにいる。
そして彼女のトレーナーは清掃活動に遅刻してきたのだ。
前々からエアグルーヴが『私のトレーナーである以上、貴様も参加してもらうぞ。人手がいるのでな』と伝えていた。
なのに遅刻したのだから、エアグルーヴが怒るのも仕方のないこと。
なのでトレーナーも言い訳することなく、土下座する勢いで彼女へ頭を下げている。
「エアグルーヴ、もうその辺にしておいたらどうだ？　皆の目の前でそうも声を荒げるのは彼にとっても、君にとっても良くない」
「……分かりました。今回は会長の顔を立ててこれ以上は言わないでやる。会長に感謝するんだな」
「はい……ルドルフ会長、ありがとうございました」
「いや、気にしないでほしい」
「遅刻してきた貴様は私と共に来い」
こうしてトレーナーはエアグルーヴに首根っこを掴まれ、一番ハードな清掃活動に励むのだった。

◇

その日の帰り道。

「はぁ、全く……あやつには困ったものだ。近頃は特に遅刻や物忘れが酷い」

「トレーナー君も忙しい身だ。そう目くじらを立てていては彼の気が休まらないんじゃないか？」

「どうして会長はそんなにも甘いのです？」

「……甘い、か。経験者だから、と言っておこう」

シンボリルドルフの言葉にエアグルーヴは首を傾げる。

「君は今やトリプルティアラのウマ娘だ。そして君を育てあげたトレーナー君もまた注目を浴びている。ドリームシリーズに進出した今、周りの期待やプレッシャーが一番のしかかってくる。私のトレーナー君もそうだったように」

今でこそ皇帝を育てたトレーナーとしてベテランと言われるシンボリルドルフのトレーナー。

しかし彼はシンボリルドルフのトレーナーになった当初は中堅止まりだった。

それがシンボリルドルフのお陰でベテランへと大成出来たまでは幸運だったが、その分周りからのプレッシャーが肥大化し、最終的には食事も喉を通らなくなるくらいになってしまった。

シンボリルドルフはそんな彼の苦悩を彼が病院に担ぎ込まれたその時まで知らなかった。いや、薄々勘付いてはいたものの、自分と共に成長してきた彼なら大丈夫だと思っていたのだ。

自分に彼という支えがあったように、彼にも支えとなるものが必要だということに気付かずに。

そんな経験をしているシンボリルドルフだからこそ、エアグルーヴが自分と同じ過ちを犯さぬよう釘を刺しているのだ。

「今は友として話そう、エアグルーヴ。もしも君が何か失敗をして、多くの人の前で怒鳴られたらどう思う？」

「……いい気分はしません。同時にもう二度と同じ過ちを繰り返さぬよう反省します」

「なら、エアグルーヴは同じ失敗をしたことはないのか？」
「……あります」
「誰にだって失敗はある。遅刻した君のトレーナー君にも落ち度があると私も思うが、注意の仕方は考えた方がいい。いくら気が立ってしまっていても、一度冷静になることだ」
「……ありがとうございます」
「明日になったらちゃんと謝るように。鉄は熱いうちに打て、だ」
「はい」
　エアグルーヴはシンボリルドルフの言葉を胸に刻み、明日は花を持ってトレーナーの元へ言い過ぎたと謝りに行こうと誓うのだった。
　そもそもエアグルーヴがトレーナーに厳しくあたってしまうのは、彼女の恋心にも大きく関わっているのだから。

◇

「……ふぅ……」
　翌日の朝。
　エアグルーヴはいつもより早く起き、自身の花壇へ寄って花を摘んで、花束にしてきた。
（トレーナーだって努力している。だからこそ、私のトレーナーであり続けてきた。会長が仰ったように、私が寛容にならなくてどうする。トレーナーがいたからこそ、私は私のまま夢を叶えられたというのに……）
　冷静さを取り戻し、反省したエアグルーヴ。
（そもそも私のトレーニングメニューの考案やメディア対応、様々な補佐や生徒会の仕事まで手伝ってくれているトレーナーに、人手が必要だからと雑用のようなことまで……トレーナーに甘えているのは私の方ではないか）
　思えばトゥインクルシリーズ中、トレーナーは己の時間すべてを自分に注ぎ込んでくれた。
　なのに近頃遅刻が目立つようになったくらいで、それもレースのような重大なことではない時の遅刻で、腑抜けていると決めつけるように怒鳴ってしまった。

（謝ろう。鉄は熱いうちに打て、だ）
トレーナーが使っているトレーナー室の前へやってきたエアグルーヴ。
彼はいつもこの時間にはトレーナー室で仕事の準備をしていることを把握している。
その邪魔にならないよう、素早く丁寧に済ませるつもりだった。いつも自分に非がある際にはそうしてきたのだから。
「む？」
なのにトレーナー室の鍵が開いていない。
不思議に思ったエアグルーヴが彼から預かっているトレーナー室の合鍵を使って中へ入った。
「……いない」
珍しく彼の姿がない。鍵が掛かっているのだからそうだろうとは思っていたが、実は昨日泊まり込みしたのではという思いもあった。が、そうではなかった。
「トレーナーにしては珍しい」
花束をテーブルにそっと置き、換気をしておいてやろうと彼のデスク方へ向かう。
窓を開けると、そよ風が朝の香りを運んできた。
するとデスクから何枚かの用紙が落ちる。
しまった、と思ったエアグルーヴがすぐにそれを拾い上げると、
「……え」
ある用紙を目にした途端に息を呑んだ。
何故ならその用紙は『担当契約解消届』だったから。
記入欄にはご丁寧にしっかりと両者の名前とトレーナーの判子も押されている。
エアグルーヴは目の前が霞み、膝から崩れ落ちた。
遅かった。やり過ぎてしまった。という後悔が彼女の心に広がっていく。
しかし反省した。そもそも自分がトレーナーとの契約解消を望んでいない。だから心から彼にそのことを伝えようと気を強くもった。

（このままトレーナー室にいれば、トレーナーがいずれ来るはずだ。その時に――）
『生徒の呼び出しをします。エアグルーヴさん、エアグルーヴさん。学園内にいましたら、生徒会室までお越しください』
するとそこで放送が流れ、生徒会室に行かねばならなくなった。
エアグルーヴは思わず舌打ちをしながら、しっかり戸締まりをしてから、花束を持ってトレーナー室をあとにした。

更なる絶望が待っているとも知らずに――

◇

「……は？」
「今伝えた通りだ。エアグルーヴのトレーナー君は暫く実家へ帰省することになった」
「……」
シンボリルドルフから告げられたことに、エアグルーヴは目の前が真っ暗になる。
「今朝理事長の秘書殿から知らされてね。理事長もお忙しいようで私から伝えるようにと頼まれた。帰省理由は彼の個人的なことであるから、私も聞かされていない」
「花束を渡し損ねてしまって、残念だったな」
ナリタブライアンが珍しく気を遣って軽くエアグルーヴの肩を叩くが、エアグルーヴにはもう誰の声も届いていない。
（私がいけなかったんだ。私がトレーナーを追い詰めたんだ。私のせいで……私が……）
「あああぁぁぁぁっ!!!!!」
涙を流し、発狂したエアグルーヴ。
シンボリルドルフはすぐにナリタブライアンと共に彼女を押さえ付けた。

しかしウマ娘の……女帝の狂気から来るパワーは皇帝と怪物の二人掛かりでも止められない。
シンボリルドルフが「誰か！」と叫ぶと、生徒会の前を通り掛かったウマ娘たちがその異変に気付いて入室し、二人に言われるままエアグルーヴを押さえ込む。
結局、エアグルーヴが大人しくなるのに６人のウマ娘の力が必要だった。
◇
「……ここは……？」
「目覚めたようだね。気分はどうかな？」
目覚めたエアグルーヴに声を掛けたのは彼女の友達であるフジキセキ。
その隣には同室のファインモーションも心配そうに彼女の手を握っていた。
「私は……」
「落ち着いたようだね。残念なことに君の花束はどうしようもなくなってしまったから処分してしまったけど、君に怪我がなくて本当に良かった」
「昨日から心配だったの。それで担任の先生から早退したことと、フジキセキから今朝のことを聞いて……」
エアグルーヴはあれから事切れたように気絶し、ナリタブライアンとその姉ビワハヤヒデによって寮まで運ばれた。
寮長のフジキセキが寮へ戻るまでは寮の管理人がちょくちょく様子を見に来ていたが、エアグルーヴは今の今まで眠っていたのだ。
「……私は女帝失格だ」
「エアグルーヴ、自分をそんなに責めないで。きっとあなたのトレーナーも何か事情があったんだよ……」
「そんなの、私以外にないじゃないか」
いつも物事の終わりというのは突然にしてやってくる。
その物事が自分にとって大きいか小さいかで、受けるショックは変わるのだ。

エアグルーヴにとって、そのショックは計り知れない。
こんなことになるなら、昨日電話でもして謝れば良かった。次もまた当然のように会えるなんて考えていた自分の甘さ、そしてトレーナーに強いてしまった厳しさに嫌気が差す。
「何ならトレーナーさんの実家にお邪魔したらいい。彼の実家の住所は知ってるんだろう？」
フジキセキの言葉にエアグルーヴは耳がピクリと動くが、表情は更に影を落とす。
「実家まで押し掛ければ、余計に愛想を尽かされるではないか」
「でも仮に契約解消をするつもりだとして、何も告げないのはトレーナーとして責任能力が欠如していると思うよ？　いくら相手と反りが合わないとなっても、最後はちゃんと話し合うのが私たちウマ娘とトレーナーの決まりだからね」
「フジキセキの言う通りだよ。それに一緒にトゥインクルシリーズを走り抜けた仲なのに、こんな終わりってないよ。実家へ押し掛ける理由は十分だと思うな」
二人にそこまで言われると、エアグルーヴも覚悟を決めた。
今の関係が終わるにしろ何にしろ、きっちりしておくことに意味がある。
そして自分の恋心のためにも。
◇
次の日、エアグルーヴは学園を休んでトレーナーの実家へとやってきた。
その手には昨日用意した物よりも大きな花束と、トレーナーの家族に渡す菓子折り。
彼の実家はトレセン学園の最寄り駅から乗ることの出来る急行列車で一時間程のところにあり、駅からはウマ娘が軽く走って２０分のところにある。
どこにでもある普通の二階建ての一軒家。ＵＲＡファイナルズを終えたあと、家族に紹介したいと招待されたことがあるからしっかりと場所を覚えていた。

「……よし」
意を決してインターホンを鳴らす。
すると奥からトレーナーの声がしたことで、エアグルーヴの手に汗が握られた。
ガラガラ
「はいはい、どちらさ……エアグルーヴ？」
「ああ、私だ……」
「とりあえず上がりなよ」
「邪魔させてもらう」
エアグルーヴは内心で困惑する。
何故ならてっきり嫌悪感をぶつけられると思ったのに、彼からはいつもの柔らかい雰囲気しかなかったからだ。
困惑したままエアグルーヴが居間へ向かうと、
「散らかってて悪いけど……」
「いや気にする……なっ!?」
その光景に目を疑った。
何故ならそこには――
「きゃうん」
「きゃんっ」
「はっはっはっ」
「きゅーんきゅーん」
――ずんぐりむっくりとした動く毛玉がうごめいていたから。
「実は1ヶ月前にポチ子が出産してね。この通り……今日から両親が前々から楽しみにしてた海外旅行に行ってその間面倒見る人間が必要だから、俺が休んで見に来たんだ。丁度エアグルーヴも暫くはレースもないし、トレーニングメニューは渡してあったから。実は2ヶ月くらい前から実家にはほぼ毎日顔出してて、子犬たちも俺に懐いてるから俺がいれば両親も安心だからさ」
「なるほど……」
トレーナーが言うポチ子とは数年前にエアグルーヴが保護した雌犬。

その後はトレーナーの実家が引き取ってくれたのだが、元々飼っていた雄犬との間に子を授かった。
トレーナーは大の動物好きであり、最近はポチ子の出産や産後の経過観察のために実家とトレセン学園を往復していたのだ。
因みに雄犬の名前はポチ雄。
どちらの犬も雑種犬であるが、北海道犬っぽい見た目をしている。
子犬たちは雄犬3匹と雌犬1匹で、皆両親に似て茶色い毛。
「……そうか。そうだったのか……」
「？　可愛いだろ？」
「ああ……」
エアグルーヴは自分がどうしてここまで会いに来たのか分かっていないトレーナーに口元を緩めながら、ポチ子がエアグルーヴに見せるように咥えてきた子犬を優しく受け取った。
トレーナーの遅刻が目立ってきたのは約2ヶ月程前から。
しかしそれはそれでエアグルーヴの胸に罪悪感が募る。
理由を知らなかったとはいえ、腑抜けていると決めつけて叱責していたのだから。
自分がもし彼の立場であれば、自分だって何度か遅刻してしまうだろう。
なのに『最近遅刻が目立つが、何か悩みでもあるのか？』と彼に気を配れなかった。
いつもそうだ。自分の理想を追い求め、最も信頼する相手のことがおざなりになる。付いてきてくれるものだ、と当然のように考えてしまう、自分の悪い癖。
「くぅん」
「はっはっはっ」
「ポチ子、ポチ雄……ありがとう」
彼女の悲しみを察した敏い犬が慰めるように寄り添ってくれる。
エアグルーヴはそれに感謝を伝えた。
「トレーナー、今度からはどんな些細なことでも私にちゃんと話してほしい。私は……貴様の愛バなのだから」

「エアグルーヴ……」
「私を狂わせるのはいつだって貴様という人間しかいない。私に何も告げず、学園を去ったと知った時……私がどれ程の絶望に落とされたか知らないだろう？」
「え」
　エアグルーヴはここに来るまでの経緯を説明した。
　反省したこと、後悔したこと、トレーナーと離れたくないということ、すべて。
「……いや、あの用紙はエアグルーヴから受け取ったものだぞ？　それもまだエアグルーヴと契約を結んだばかりの時に」
「……ん？」
「だから、エアグルーヴが今まで結構な数のトレーナーと契約解消してきたから、エアグルーヴが自分から『もしそうなった時のために預けておく。貴様もそのつもりで励め』って。目の前でサインもしたし」
「あっ……」
「それで実家に戻る前に実家に持って帰る仕事の資料をまとめてたら、出てきたんだ。それが懐かしくて、でも初心を忘れないでいられる俺の宝物なんだ」
「そうだったのか。それにしても出しっぱなしは良くないのではないか？」
「いや、その日の内に実家に帰る予定だったし、電車の時間も迫ってたから……それにトレーナー室なら泥棒も入らないだろうし……」
　しどろもどろになりながら、誤魔化すように側にいた子犬をもふもふするトレーナー。
　いつもの彼らしいその仕草に、エアグルーヴはキュンっと胸が高鳴った。
「たわけ♡」
「すみません……」
「許してほしければ、明日から私がここに通うことを許可してもらおうか」

「え」
「座学が終わったらトレーニングがてらここまで走ってくる。生徒会の仕事がある場合は遅れるだろうが、今は比較的忙しくない時期だからな。寮長には戻り次第明日から帰りが遅くなる旨を伝えて、許可を貰う」
「いやいやいやいや！」
「何？　貴様だけ、このもふもふパラダイスを満喫するというのか？」
「いや、そうじゃなくて！　わざわざ通わなくてもいいだろ！」
「……私がしたいんだ。いいじゃないか、私と貴様が周りからどう思われようと、いい方向にしか思われないのだから」
　それとも、私の存在はトレーナーの邪魔になるのだろうか？……そう悲しげに問われれば、トレーナーは頷く他ない。
「最初から素直に頷け、このたわけが♡」
　こうして二人の間にあった黒い影は綺麗に消え、エアグルーヴはもうこんなことにならないように先ずはトレーナーの私生活に関与しようと決めた。

トレーナーさんは私だけだよね!?

「ねぇねぇ、ルナ？」
「なぁに、トレーナー君？♡」
　シンボリルドルフはベンチで自分を横抱きにしてくれている自身の愛するトレーナーの声に、上目遣いで小首を傾げる。
「あれ、止めなくて平気？」
「？」
　彼が言う視線の先には、
「ベロッベロッ……ベロ～ッ、ベロベロッ♡」
「あの～、エアグルーヴ？　どうしてそんなに俺の顔を舐め回してるんだ？」
「ふぅ……気にするな。貴様を私の物だと皆に示しているだけだ」
　ベンチで自分を横抱きさせ、顔をベロベロと舐めるエアグルーヴは平然と返した。
　あの勘違いからエアグルーヴの行動はエスカレートする一方で、最近ではトレーナーの両親にすら気に入られて外堀が完全に埋まっている。
「副会長が率先して学園の風紀を乱してはいけないと思うの」
「旦那様は私にベロベロされるのが嫌なの？」
「二人きりならいいよ。あと旦那様って呼び方止めてね」
「分かった。じゃあ……ご主人様？♡」
「もっといかがわしい感じになるから止めてね」
「むぅ……」
「トレーナー室なら好きに呼んでいいから……」
「ああ、分かった♡　ベロベロッ♡」
「……」
　二人のやり取りを見ていたシンボリルドルフは、
「ルナはいいと思うよ？　担当トレーナーと仲良しなのはいいことだもん。ルナもペロペロしようか？」

「しないでくれ。いつも通りで頼む」
「はぁい♡　じゃあいっぱいナデナデしてぇ？♡」
「はいはい……よしよし。いい子いい子。午後の執務も頑張ろうな～」
「ん～♡　頑張るぅ♡」

「……♪」

とある日の午後。

フジキセキは歌でも歌い出しそうなくらい上機嫌に、学園内の廊下を歩く。

近頃はトレセン学園内でウマ娘とその担当トレーナーが仲睦まじく過ごすところを多く目にする機会が増え、みんなが幸せそうでフジキセキはそれが自分のことのように嬉しいのだ。

あれだけ素直になれなくて苦悩していたエアグルーヴでさえ、最近ではメーターが振り切れたように幸せそうにしている。

多感な年頃のウマ娘であるためちょいちょいトラブルはあるものの、それは彼女たちをより幸せな舞台に上がらせる演出となり、結果彼女たちとトレーナーたちの関係は良くなっていく。

「こんにちは、トレーナーさん♡」
「ああ、フジ。こんにちは。そしていらっしゃい」

当然、フジキセキもその中の一人。

ただ彼女の場合は他のカップルみたいに、自身の担当トレーナーとトラブルはなく、愛を育んでいる。

今日はトレーニングも休みのため、フジキセキは心ゆくまでトレーナーと触れ合うつもりだ。

「なんかご機嫌だね？」
「周りがとても良い雰囲気だからね。みんなが幸せそうに笑っていると、こちらまで嬉しくならないかい？」
「ああ、そうだね。幸せの連鎖というのはいいことだ」
「そうだよね♡　だから私も幸せなんだ♡」

トレーナー室は二人きりになれて、フジキセキが思い切り彼に甘え

られる時と場所。
　その証拠にフジキセキはデスクに座るトレーナーの膝上に腰を下ろし、横抱きされながら愛する彼の首筋に顔を押し付けるように擦り寄る。
「はぁ……どうしてトレーナーさんはこんなにもいい匂いがするんだろうね？♡」
「自分の匂いの良し悪しなんて知らないよ」
「タキオンに頼んでトレーナーさんの匂いの香水でも作ってもらおうかな♡」
「いらないと思うし、タキオンもそこまで暇じゃないと思うよ」
「残念だな……あ、それよりいつもの、いいかい？♡」
「フジは本当に好きだねぇ」
「私をこんな風にした張本人が言うセリフかい？♡　見たところ急ぎの仕事はしてなさそうだし、してくれないかな？♡」
　彼女が言う『いつもの』とは、耳のマッサージ。
　ウマ娘の耳は尻尾と同じくデリケートな箇所だが、本人が心を許した相手にのみこうしたケアを任せる。
　フジキセキの場合はトレーナーのマッサージの腕がいいため、もう癖になってしまって自分でマッサージしても物足りないのだ。
◇
「痛くない？」
「んっ、気持ち、いい……はぁん♡」
「あはは、フジは本当に耳マッサージが好きだね」
「うん、大好き……んぁ、あっ♡」
　愛するトレーナーに念入りにマッサージをしてもらうと、思わず熱い吐息が漏れるフジキセキ。
　いつもは凛々しく誰もが見惚れてしまう彼女が、今のように蕩けた顔で微かに涎を零しているところを見たら、彼女のファンは驚愕するだろう。
「トレーナーさんは、んっ、本当に、あんっ、テクニシャんんっ、だね♡」

「そんな言い方は止めてくれよ。まあ確かに俺のマッサージって評判いいけどさ……」
「……ん？」
　室内の温度が1℃下がった。
「え、ちょっと、待って」
「？　どうしたの？　もういい？」
「いや、マッサージをしてもらってる場合じゃないかもしれない事案が発生しているかもしれない」
「それはどんな？」
「今、トレーナーさんはなんて言ったのかな？」
　死んだ魚の目の様にトレーナーに訊ねるフジキセキ。
「どうしたの、もういい？」
「その前」
「……？」
「マッサージの評判云々のとこ」
「ああ！　聞いてくれ、フジ！　フジがあまりにも俺のマッサージの腕前を褒めてくれるもんだから、試しに他の人にしてあげたら本当にみんな喜んでくれたんだ！」
「へぇ……悦んだんだ？」
　温度がまた1℃下がった。
「そうなんだよ！　めっちゃ気持ちいいって！」
「……そうなんだ」
「そのせいって言うのも変だけど、みんながまたして欲しいって言うんだ。それで今は何故か完全予約制のマッサージ師みたいになっちゃって……みんなやっぱり肩こりとか酷いらしいからさ」
「……ふぅん」
　温度が更に2℃下がり、時間経過と共にそれは下がり続けていく。
「あれ、なんか肌寒くなってきたな……」
「トレーナーさん」
「ん？」
「ちょっといいかな？」

「なになに？」
「手品を見せてあげる」
「おぉ、お得意のやつか。今日は何を見せてくれるんだ？」
何も知らないトレーナーは純粋にフジキセキの手品をワクワクして待つ。
「私の目を見て？　そう、ジッとして、私に集中して」
「……」
まじまじとトレーナーに見つめられ、フジキセキは思わず背筋がゾクゾクと嬉しい悲鳴をあげる。
そして、
「あむっ♡」
「んむっ!?」
我慢出来ずにトレーナーの唇を貪った。
そもそも彼女はトレーナーに手品を見せる気なんてさらさらなく、ただ彼の視線を自分に集中させたかっただけなのだ。
なのにいざ見つめられると、この上ない愛情が腹の底から溢れ出し、理性が飛び散った。
「んっ、ちゅっ……ふふっ、引っ掛かったね♡」
「フジ……」
「そんな表情をされると、ますますゾクゾクしちゃうなぁ♡」
「意地悪な子は苦手だ」
「嫌いじゃなくて、苦手って言うところがまた優しいね♡」
「というか、なんでこんな回りくどいキスを？　いつもなら素直に強請ってくるのに」
「……私にだって色々あるんだよ♡」
フジキセキはそう返しつつも、腹の底は嫉妬の炎で煮えくり返っている。
それも当然だ。あの素晴らしいマッサージの手腕を自分以外にも惜しげもなく披露しているのだから。
こう見えて、フジキセキは嫉妬深いウマ娘。
普段の彼女しか知らない者からすれば、彼女のトレーナーの方が彼

女の周りに集まるウマ娘に嫉妬してるだろうと思いそうだが、実のところは真逆である。
信号を渡ろうとしたところで足がすくんでしまった腰の曲がった老婆にトレーナーが優しく手を差し伸べたり、親とはぐれてしまった幼い子どもに優しく語りかけて肩車をしてやりながら一緒に親を探したり、その他諸々嫉妬する場面ではないのにフジキセキはそうした場面でも嫉妬してしまうのだ。
そもそもフジキセキは常に皆を気遣う側のウマ娘で、なかなか自分の気持ちを周りに吐露出来ずにいた。
彼女自身がその立場に慣れてしまっているのあり、メイクデビューを控えていた頃はそのプレッシャーに押し潰されそうだった。
そんな自分に優しく寄り添い、プレッシャーを共に背負ってくれたのがトレーナー。
故にフジキセキのトレーナーに対する愛情や独占欲は、物凄く強い。
前にチャリティイベントで行われたオープンレースでゲスト枠として出走したフジキセキ。
見に来てくれた人々を楽しませられる走りをしようと考えていた時、一番人気である彼女を揺さぶるために名も知らないウマ娘が、フジキセキのトレーナーのことを『運がいいだけのトレーナーだ』と言った。
『才能あるウマ娘と契約すれば、誰だって名トレーナーと呼ばれる。だからあんたのトレーナーは運がいいだけのトレーナーだ。あんたも大変だな、あんななよなよした奴がトレーナーで』
そんなことを言われた瞬間、フジキセキは圧倒的な威圧感を放っていた。
そして、
『潰す』
ただそう言い残してゲートインし、先行作だったのにＵＲＡファイナルズ決勝戦のような逃げを打って2着との差を大差で制し、
『私のトレーナーさんを過小評価したくせに、そのトレーナーさんが

愛情込めて育ててくれた私に一切近付けなかった鈍足ウマ娘は誰だったかな？　ああ、確か君だったね。名前は覚えてないけど、その無様な顔は良く覚えてるよ』

なんて絶対零度の眼差しと声でにこやかにその者の肩を叩くと、その者は二度とターフに立つことが出来なくなった。

「……むぅ」

「さっきからどうしたんだ、フジ？」

「なんでもない」

「なんでもないなんてことないだろ。こんなに頬を膨らませて……」

頬をむにむにと揉みしだきつつ、指摘するトレーナー。

対してフジキセキはトレーナーに頬をむにられて思わず嬉しくなってしまう。

なので自分は怒っているんだぞ。理由は自分で考えて。と告げるようにツンとそっぽを向いた。

そこへガラガラとトレーナー室のドアが開く音がし、

「どもどもー、イチャイチャタイムを邪魔してすみませんねー」

セイウンスカイが入ってくる。

フジキセキが怒気を抑えて「何か用かな、ポニーちゃん？　ヒシアマならトレーニングジムにいると思うよ」と告げた。

「いやいや、私が探してるのはフジキセキ先輩のトレーナーさんです」

「……ほう」

顎に手をあて、セイウンスカイを見据える。

もしマッサージ目的ならそれらしい理由をつけて追い払わないといけないから。

「あれ、今日だっけ？」

「はいー。なので早く来てください♪」

「分かっ――――」

「ごめんね、ポニーちゃん。悪いんだけど、彼は私のトレーナーで、今は私のマッサージ中なんだ。だから今日のところは諦めてくれないかな？」

本当なら永遠に諦めてほしいという本音を隠しつつ、フジキセキが

割って入る。
　しかし、
「え～、せっかくここまで来たのに～。困りますよ～」
　セイウンスカイは諦めない。
「というか、ここ寒くないですか？　外より寒い気がするんですけど……」
「なら早く出て行ったらいいと思うな」
「いや、ですから、予約したんですって」
「フジ、君のマッサージはいつでもしてあげるから、セイウンスカイさんのトレーナーのマッサージに向かわせてくれ」
「だからどうして……え？」
　トレーナーの言葉に、フジキセキは動きが止まる。
　それもそのはず、フジキセキはずっと愛する彼が自分以外のウマ娘のマッサージをすると思っていたから。
　しかし実のところ、トレーナーはウマ娘のマッサージは請け負ってないし、そもそもウマ娘側もフジキセキのトレーナーにマッサージなんて畏れ多くてお願い出来ないのだ。
「おやおや～、フジキセキ先輩はまさかトレーナーさんが私のマッサージをすると思って怖い顔してたんですか～？」
　ニヤニヤと追撃を始めるセイウンスカイに、フジキセキはたじろぐ。
「そうだったのか、フジ？　安心してくれ。俺は異性ならフジのことしかマッサージとかしない。頼まれても断るし、同じトレーナーでも女性のトレーナーの場合もしっかり断ってる」
「ほうほう、ラブラブのあっつあつですなぁ♪　さて、先輩。誤解は解けましたかにゃ？」
　フジキセキはトレーナーの言葉が嬉しいやら、勘違いしていたことが恥ずかしいやらで首まで真っ赤になっているが、何とかコクリと頷きを返した。
　いつの間にか室温も温かくなっている。
「それじゃあ、ちょっと行ってくるね。それともフジも一緒に行く？」

「……行くぅ」
フジキセキが小さな声で伝えると、トレーナーはすぐに彼女へ向けて左腕を差し出した。
「行こうか」
「……うん♡」
(私がいてもお構いなしですなぁ……私もトレーナーさんとここまでじゃなくても、ラブラブになれたらなぁ)
こうしてトレーナーのエスコートに尻尾ブンブン、気分もルンルンのフジキセキは今日も幸せな時間を過ごし、それを見つめるセイウンスカイは苦いコーヒーを飲みながら自分のトレーナーをどう落とすのか思案するのだった。

釣り上げたのはどっち!?

ある日の昼休み――
「ねぇねぇ、トレーナーさん！」
「はいはい、毛布ね。時間になったら起こすから」
「ん、ありがとー♪」
またある日の昼休み――
「トレーナーさーん」
「はい、おやつのプリン。今日は併走頼んであるからサボらず頑張ってね」
「わおー、頑張りまーす♪」
またまたある日の昼休み――
「ねぇ……トレーナーさん」
「はいよー、今日はトレーニング休みなー。お疲れさーん」
「わーい♪」
◇
「にゃあああぁぁぁぁ！　なんでこうなるかなぁぁぁぁぁっ!?」
「どうされたんです、突然叫んだりなんかして？」
セイウンスカイはトレーナーに言われるがまま本日のトレーニングが休みになり、流されるがままいつものように趣味の釣りへとやってきた。
ただ今回は近場の多摩川沿いにある有料の釣り場で、ここに来た理由はとある相談のため。
そもそも今日のトレーニングを休もうなんてこれっぽっちも彼女は思っていなかった。なのにトレーナーが変に察して休みにしたのだ。
でもせっかくトレーナーから休みを貰ったので趣味の釣りをすることにし、悩みを聞いてもらうために同じく休みで予定もなくカフェテリアで適当に茶をしばいていたグラスワンダーに『彼氏にお魚料理を作ってあげるとかどうですかにゃ？』と唆して連れてきたのであ

る。
「トレーナーさんの好きなものを訊こうとすると、トレーナーさんが変に察して上手く訊けず終いなんだよ～」
「……なるほど。その相談がしたくて私に声をかけた、ということですね」
「私もキングのとこやエルちゃんのことみたいに愛バ弁当渡してラブラブになりたいんだよ～。グラスちゃんのとこはもう熟年夫婦感あるし～。スペちゃんは本人が天然だから参考にならなさそうだし～」
「私とトレーナーさんは将来を誓った仲ですから。それはそれとして……ひとつお尋ねしてもいいでしょうか？」
「何？」
「そもそもスカイさんは、ご自分のトレーナーさんと付き合ってすらいない、という認識でいいですよね？」
「……」
グラスワンダーの根本的な指摘にセイウンスカイの眼は雨が降りそうな曇り空のように濁り、無言で水面の方へと視線を移す。
そう、グラスワンダーが言ったようにセイウンスカイは自分のトレーナーのことが心の底から大好きだが、なんだかんだいつもその恋心を伝えられずにいるのだ。
なので上手くいっている皆のところのようになるためのコツと、相手にアプローチをしてあわよくば告白してもらおうと考えているのである。
「……では別の質問を。スカイさんはトレーナーさんとどこまでの仲なのでしょうか？　連絡する頻度とか」
「……朝と夜には必ずメッセージアプリにメッセージが届きます」
「メッセージの内容は？」
「朝は起きてるかの確認と登校してるかの確認。夜は夜更ししてないかの確認とその日のトレーニングの良かったとこと悪かったとこの総評ですね」
「完全に手の掛かる教え子に対するアレですね……でも放置されているよりはいいと考えるべきでしょうか？」

「良くないよ！　私だってトレーナーさんともっとキャッキャウフフなやり取りしたいの！」
「キャッキャウフフって……」
　そもそもセイウンスカイがトレーナーに惚れたのは、サボり癖があってアスリートウマ娘としては平凡でしかない自分に手を差し伸べてくれて、異端の逃亡者とまで周りから評されるウマ娘にしてくれたから。
　サボり癖のことも注意はするが、最初から無理なく自分と対話してその都度トレーニングメニューを合わせ、趣味や悪戯にもなんだかんだ付き合ってくれる。
　一緒にいてとにかく居心地がいい。まるで実家にいるかのような安心感。だからこそセイウンスカイはトゥインクルシリーズを終える頃にはトレーナーにすっかり片想いしていたのだ。
「はぁ、私もスペちゃんやエルちゃんくらい素直になれたらなぁ。でもいざとなるとどうしても恥ずかしくってさぁ……」
「その気持ちは分かります。私だってトレーナーさんの言動には、いつも恥ずかしい思いをさせられていますし、私が頑固なせいもあってトレーナーさんの優しさに甘えていることは多々あります」
「いやいや、あんなに普段からイチャイチャしてて？　グラスちゃん、トレーナーさんの脚に尻尾巻きつけてるよね？」
「こほん……と、とにかく、先ずはスカイさんがちゃんとアプローチするところから始めないといけないと思います。今のままでは、とても卒業までにお付き合いすることは出来ませんよ。卒業するから告白するってこともスカイさんは出来そうにないので、こうもこじらせてしまっているのでしょう？」
「悔しいけど、ご名答ー」
　グラスワンダーの的確な言葉にセイウンスカイは項垂れてしまう。
　自分のこれまでの悪戯も、その都度トレーナーを巻き込むことも、すべて好意からの裏返しであり、そのお陰でトレーナーはセイウンスカイのことを念頭に置いている。
　しかし好意をちゃんと言葉にしてない上に、トレーナーの真面目で

世話焼きな性格上、彼にとってセイウンスカイの評価は「手の掛かるじゃじゃウマ娘」程度だろう。
「まあその第一歩として私たちのような関係になりたいと……キングさんやエルのようにお弁当をお渡しするのはいいことだと思いますよ」
「やっぱ胃袋を掴むのがいいよね！」
「スカイさんってどの程度お料理出来るんですか？」
「お魚は捌けるよー」
「それは素晴らしいですね。それで？」
「……お魚って焼くのと揚げるのとお刺身が美味しいんだよねー」
「つまり煮付けのような手の込んだ物は無理ってことですね」
グラスワンダーの指摘にセイウンスカイはコクリと頷いた。
料理が下手という訳ではない。しかしやらないだけでそれ以上でもそれ以下でもないのだ。ザ平凡なのである。
「おむすびが結べるとかは？」
「キングじゃあるまいし、それくらいは出来るよー」
「（キングさん結べないのですね……今度それとなく教えてあげましょう）そうですか。ならば、これまでお魚でしていたことを他の食材でやればいいと考えては？　そもそもお弁当に手の込んだお料理はそんなに必要ありませんから」
「それもそっか。それでどうしたらいいの？」
「お野菜をフライパンで焼けば野菜炒めが出来るでしょう？　お水をちょっと足して蓋をし熱すれば温野菜に出来ます」
「ほうほう、確かに」
「それこそ野菜を洗って食べやすい大きさにカットして盛り付けるだけで、それはサラダになります」
「ふむふむ」
「揚げ物が出来るならフライや天ぷらなんかも出来るでしょう？　お魚に限らず、野菜の天ぷらとかも少し勝手は違ってしまいますが、レシピを見れば出来ると思うんです。水切りとかしっかりやらないと

油が飛んでしまいますが、お魚もそこは同じでしょうし」
「おー、料理が出来る人の有り難いアドバイスって感じ」
「全てはトレーナーさんに相応しい大和撫子になるためです♪」
そう言って頬を赤く染めつつも微笑むグラスワンダーはまさに恋する乙女であった。
セイウンスカイはそんな彼女を見て、素直に綺麗だなという感想を抱き、自分もいつか彼女のように相手と深い信頼関係を築きたいと思う。
「じゃあ寮に帰ったらやってみますかー。おっと」
そう言いつつ釣り竿を引き上げ、大きな鱒を釣り上げた。
「グラスちゃんのも引いてるよ？」
「あら、まあ……これどうすれば？」
「落ち着いて落ち着いてー。一先ず竿を――――」
相談も一通り落ち着いたところで、運良く釣り場の放流時間となり、二人の竿に魚が食いつく。
なのでその後は入れ食い状態で、グラスワンダーも釣りを楽しみ、食材を無事にゲットするのだった。
因みに釣れた魚を締めたり血抜き処理といったことはセイウンスカイが相談に乗ってくれたお礼としてやってくれたそう。
◇
翌日。
「昨日はありがとね、グラスちゃん」
「どういたしまして。私の方こそ頼りにしてもらえて嬉しかったですから。あとお陰で昨晩はトレーナーさんに鱒の天ぷらをご馳走することが出来ました」
「……早速ラブラブの糧になったようで何より」
「これくらいは普通です♪」
「……凄いな～」
朝のホームルーム前の教室内で、二人はそんな会話をする。
すると当然、
「グラスちゃん、天ぷらは衣が白？　それとも黄色？　どっちでもい

いけど食べてみたいな！」
「あの、出来れば今度教えてくれないかしら？　私もそろそろにぃ……トレーナーにちゃんとした揚げ物を食べさせてあげたいの！」
「エルも天ぷらのレッスンしてほしいデース！」
　スペシャルウィークたちが輪に加わってきた。
「今度ご馳走しますね♪」
「わーいわーい♪」
「天ぷらを揚げる時、油の温度は１８０℃。一気に入れてしまうと油が冷えてしまいますから、少しずつの方がいいです」
「な、なるほど……」
「デース……」
「唐揚げなんかは１６０℃でじっくりと揚げ、中まで火が通ってから１７０℃にするとカラッと仕上がりますよ」
「ふむふむ……」
「メモしマース……」
「かき揚げをする時は一気に種を入れるのはダメです。お玉で少量の揚げ種を揚げ鍋に散らす感じで入れるのがいいです。散らしたものをすぐに箸でまとめればいいだけですから。ところどころに隙間が空いているのが、かき揚げというものです。今度実際にやって見せますね」
「お願いするわ」
「デース！」
　グラスワンダーの説明だけでよだれを垂らすスペシャルウィークと、メモを取るキングヘイローとエルコンドルパサー。
　一方でキングヘイローとエルコンドルパサーをセイウンスカイは『乙女だなぁ』と思って微笑んだ。
　因みにセイウンスカイは昨日、ニシノフラワーに監修してもらいながらお弁当を作った。
　無難に塩焼きにした鱒の切り身と鱒のつみれ汁である。
　つみれ汁はニシノフラワー直伝なので、かなりの自信作に仕上がり、つみれ汁はちゃんと汁物用の魔法瓶で保温済。

ただ、
（色合いが地味なんだよねー）
茶色いおかずばかりのお弁当になってしまったのが心残りである。
そもそも女子力の高いお弁当というもの自体が、セイウンスカイにとってハードルが高かったのだ。
でも――――
（美味しいって食べてくれたらいいなー♡）
――――そんなことより愛情だけはたっぷりと詰め込んだお弁当であるのには間違いなかった。
◇
そして作戦決行の昼休み。
セイウンスカイはレース前よりも緊張しつつ、トレーナー室へやって来た。
ちゃんとグラスワンダーのアドバイス通りに、今朝は事務的な連絡のあとで自分から『いい鱒が釣れたので、お昼にご馳走しますね♪』と伝えておいたのだ。
トレーナーからも楽しみにしているといった返事をされ、それだけでセイウンスカイはベッドの上でニヤニヤが止まらなかった。
「どーもー♪」
「おお、来たか」
「おやおやー？　ソファーに座って準備万端って感じですなー。そんなにセイちゃんの手料理を楽しみにしてたんですかー？」
「そりゃあな。あのセイウンスカイがわざわざ俺のためにご馳走してくれるなんて初めてじゃないか」
「バレンタインのチョコとかちょいちょい手作りしてますよー？」
「いやいや、あの面倒くさがりのウンスだぞ？　そんな俺の愛バが、わざわざ、いい鱒が釣れたってだけの理由で、作ってくれたんだ。嬉しいに決まってる！」
「……泣いていいですか？」
確かにこれまでの付き合いから、自分が面倒くさがりなのは知られている。

そして率先して自分からトレーナーに手料理をご馳走したこともない。そもそもそうするのが恥ずかしかったから。
全てこれまでの自分の行いが招いたことだが、セイウンスカイはチクチクと胸が痛くなる。もっと素直になれていれば、と。
「ウンスはつよい子泣かない子ー」
「むぅ、頭撫でたら機嫌直すと思ってません？　セイちゃんはそんなお手軽なお子様じゃありませんよー？」
「尻尾ブンブン回ってますが？」
「〜〜〜〜〜〜っ!!!?」
尻尾は口程に物を言う。セイウンスカイは顔を真っ赤にして、手で尻尾を押さえた。
それも仕方ない。こうして大好きなトレーナーの温かい手で撫でられるのは、ひだまりのような心地良さがあるから。
「で、例のブツは？」
「言い方ぁ」
「腹減ってんだよー」
「もう、はいどうぞー」
セイウンスカイは持ってきた手提げ袋から自分のより一回り大きなお弁当箱を手渡す。
しっかりと事前にトレーナー用のお弁当箱を用意しておいたのだ。
「では早速オープン！」
ぱかり、と蓋を開けたトレーナーは、
「おお、美味そう！」
満面の笑みを浮かべる。
セイウンスカイはもうその笑顔が見れただけでお耳も尻尾もご機嫌に揺れた。
「ちょっと茶色いおかずばかりですけど、味は保証しますよー♪」
「色合いなんて気にしないさ。切り干し大根とかひじきと枝豆の和え物とか俺好きだし」
「それは良かったですー」
ナチュラルにトレーナーの好物が分かり、セイウンスカイはしっか

りと脳内メモに書き残す。
「この白菜は……浅漬けか？」
「はい。苦手でした？　前に食べてたの見たんで、大丈夫かと思ったんだけど……」
「いやいや、好きだよ」
「ほっ……」
　そんな会話をしつつ、しっかりとセイウンスカイはつみれ汁も用意し、トレーナーはそれはもう気持ちのいい食べっぷりだった。
　見ているセイウンスカイが『毎日でも作ってあげたいなー♡』と考える程に。
◇
「いやぁ、美味かった。ありがとう、ご馳走さま」
「いえいえー、お粗末さまでしたー♡」
（えへへ、綺麗に食べてくれたなぁ♡　キングやエルちゃんが料理に目覚めたのも分かるなぁ♡）
　しかしここで満足してはいけない。
　そもそも目的は自分の好意をトレーナーにそれとなく伝えることなのだから。
　なのに、
「こんな美味いもの毎日作ってもらえるなら、ウンスと結婚する男は幸せだろうな……」
「にゃ？」
　トレーナーから見事な先制パンチを食らう。
　当然、トレーナーにそんな意図は一切ないのだが、セイウンスカイに効果は抜群だ。
「にゃ、にゃはは……そうですかねー？」
「ああ、ウンスを見てきた俺が言うんだから間違いない」
「そ、そっか……にゃひひひひ……♡」
　嬉しくて思わず笑い方が変になるセイウンスカイ。
「まあ気が向いたらまた作ってくれよ。お礼と言っちゃなんだが、お返しにどっか行きたいとこ連れてってやるからさ」

「……それはどこでも？」
「海外とかは勘弁な。まあ遠出の海釣りとかまでならなんとか……」
「じゃ、じゃあさ……」
「うん？」
「トレーナーさんのお家とか、ダメ、ですかね……？」
　消え入りそうな声でなんとか訊ねたセイウンスカイに、トレーナーは小首を傾げる。
「俺の家？　何も無いぞ？　ただ寝るためだけに帰ってるボロアパートだし……」
「……」
「……分かった。分かったからそんな泣きそうな顔するな。でもつまらないとか文句言うなよ？」
「あはっ♡　言いませんともー♡」
「急にご機嫌になりやがったな……」
「だって好きな人のお家に行けるとか最高じゃ……あ」
「……ウンスさん？」
　舞い上がったセイウンスカイは思わず本音がぽろりと口から出てしまった。
　慌てて口を閉じてもあとの祭り。故にセイウンスカイは即座にその場から逃げようとしたが、
「ウンス、ステイ」
「ッ!!」
　トレーナーの指示についつい従ってしまう。
「好きってどういうことだ？」
「……黙秘権とかは……」
「異性として好きって言ってるようなもんだと解釈する」
「で、ですよねー……にゃはは、はは……はぁ……はい、そうです」
　顔を真っ赤にして白状するセイウンスカイ。
　そんな彼女にトレーナーは、
「うん、知ってた」
「によ？」

まさかの言葉を返してきた。
「ウンスとの付き合いは長いからな。ほぼ毎日一緒にいたし、ウンスがどういうウマ娘かもそれなりに分かってる。バレンタインデーに手作りチョコを渡してきた辺りから、そうかなーって」
「じゃ、じゃあ、今まで私の好意に勘付いていながら泳がせてたの？」
「人聞きの悪いことを言うなよ。まあ結果的にそうだったけど」
「……」
「それにウンス覚えてるか？　俺がホワイトデーに渡したお返しを」
「えっと、りんごのキャンディ……」
「その意味知ってる？」
「……えっと知りません」
「だよな。だから俺は敢えて説明はしなかった。だってそれで逃げられたら捕まえるの大変だからな」
セイウンスカイは首を傾げる。
するとトレーナーは小さく笑って説明を始めた。
「仮にその時意味を伝えたら、ウンスの性格上『なんですかそれー？セイちゃんはそんな意味ありませんけどー？』とか言って逃げただろ？　お前は好意を真っ直ぐに告げられると逃げ道を探すから」
「うぐ……」
「だから伝えなかった。そうすればいつかウンスの方からボロを出すと思ったからだ。だってお前、肝心なとこでポカやらかすじゃんか。今みたいに」
「あぐ……」
「んで、そうなると逃げられない。異端の逃亡者を捕まえるなら首根っこを押さえないとな」
「なんと悪趣味な……」
「それくらいこっちは我慢したんだよ」
そう言ってトレーナーはセイウンスカイの腰に手を回し、彼女の顎をクイッと持って自分の方へと向けさせる。
「やっと捕まえたぞ。俺で良ければ付き合ってほしい。もうお前に振り回されない人生なんて物足りなくてつまらないんだ」

「……はい♡」

こうして異端の逃亡者はいとも簡単にトレーナーから愛の手綱で捕まった。

しかしそうなってしまえば、彼女は本当の猫のようにうんと彼に甘え、夢にまで見たイチャイチャを堪能する。

午後の授業が始まることを告げにスペシャルウィークとグラスワンダーが来るまで……。

不覚です……！

本日は晴天なり。
そんな空の下を、グラスワンダーは足取り軽く歩く。
隣にはいつも仲良くしているスペシャルウィークとエルコンドルパサーの二人。
今日は三人でそれぞれが愛するトレーナーのために明日ご馳走する予定のお弁当の材料を買うため、学園の最寄り駅にある駅地下のスーパーへやって来たのだ。
「まさかスペちゃんがお弁当を用意するなんて思わなかったデース！　てっきりスペちゃんは食べる専門だと思ってたのに！」
「エルちゃんひどーい！　私だってちょっとはお料理出来るんだよ!?　それに普段用意しないのは、トレーナーさんに私の負担になるからしないでって言われたからなんだから！」
「でもエルやキングさんたちのように用意したくなったんですよね？」
グラスワンダーの指摘にスペシャルウィークは頬を赤く染めて「だってぇ……」と俯く。
「なんかみんな担当トレーナーさんたちとお弁当交換とかしてていいなぁって思って……」
「元はと言えば、キングが発端デスけどね……。グラスはお弁当よりも直接作りに行ってるんデシタっけ？」
「はい。いつものメンバーの中では、私が一番最初に担当のトレーナーさんと恋仲になりましたからね♪」
珍しく得意げに微笑み、胸を張るグラスワンダー。
彼女が言うように、いつもの仲良しメンバーの中でグラスワンダーは一番早く自身のトレーナーとそういう仲になった。
頑固な自分ととことん向き合う男らしさや、何事にも一途なところ。そういったところがどストライクだったグラスワンダーは、トゥインクルシリーズを終えたあとの慰安温泉旅行でその気持ちを伝え

たのだ。
それからのグラスワンダーは通い妻状態である。
故に何度もトレーナー宅にお邪魔して手料理を振る舞ったりして、彼の胃袋はガッチリ捕まえているのだ。
「グラスちゃんはいつもは作ってないのに、どうして明日は自分のトレーナーさんにお弁当作るの？」
「スペちゃんの言う通りデス！　グラスもお弁当作戦に便乗……痛タタタッ!?」
「私はそんなこと考えてません」
にっこり笑顔でエルコンドルパサーの耳を引っ掴むグラスワンダー。
スペシャルウィークが「まあまあ」と止めると、グラスワンダーは手を離して先程の質問の答えを述べる。
「明日はお付き合いして２００日目の記念日なんです。ですから朝食は勿論、お昼もお夕飯も全て私の手作りを食べさせたいんです♡」
そうすればいつもより長くトレーナーさんと共にいられる時間も増やせますし……と彼女が付け加えれば、スペシャルウィークもエルコンドルパサーも『おぉー！』と感心した。
「流石はグラァス！　エルたちよりも先に進んでいるだけのことはありマス！」
「そういうことも大切だよね！　流石グラスちゃんだね！」
「それ程でも……♪」
そんな和気あいあいと話している最中、グラスワンダーの足が止まる。
スペシャルウィークたちがその様子に首を傾げると、グラスワンダーは一点を見つめ始めた。
そこには――
グラスワンダーのトレーナーと彼の左腕に両手を絡める大人な女性

――――がいた。
これには流石のエルコンドルパサーも固まるし、スペシャルウィークも唖然と口を開けてしまう。
浮気をされた張本人のグラスワンダーはと言えば、
「……ふふっ」
絶対零度の眼差しで、ただただ微笑むだけ。
その笑顔は控えめに言って般若面よりも恐ろしく、橋姫よりもドス黒いオーラを放っていた。
スペシャルウィークもエルコンドルパサーも腹の底から震えがくる。
「み、見間違いじゃ……ないよね？」
「私が見間違えるとでも？」
「トレーナーさんのシスターとかデスかね？」
「唇同士でキスしてますけど？」
スペシャルウィークたちもまさかグラスワンダーのトレーナーが浮気する人間だとは思わなかった。
あれだけグラスワンダーに愛情を注ぎ、彼女にだけ愛を囁いているのを何度か耳にしたことがあるから尚更。
しかし浮気する人間に限って、相手に愛の言葉を絶やさなかったりする。
「グラス……」
「グラスちゃん……」
「二人共、ごめんなさい。でも私は大丈夫です。浮気しても最後は私の隣にいてくれれば私は構いませんから」
ただ、明日の記念日はどうしましょうか……とつぶやくグラスワンダーの眼差しは、レースで差し込むそれとはまた別次元の鋭さを見せていた。
◇
翌朝。

グラスワンダーは予定通り、トレーナー宅に合鍵を使って上がり込み、朝食の準備とお昼のお弁当の準備をする。
どんなに相手が憎くとも、食材に罪はない。なので美味しい物に仕上げた。
「おはようございます、グラス」
「……おはようございます、トレーナーさん。昨日は随分と楽しんだようですね？」
「先輩の結婚式はまあ楽しかったですよ。同期トレーナーたちでうまぴょい伝説披露は緊張しましたが……」
グラスワンダーの刺々しい言葉にトレーナーは気にする素振りもなく返す。
それを見てグラスワンダーの笑みは更に温度が下がるが、トレーナーはそれにも気付かず「今日のお味噌汁も美味しいですね」といつもの柔らかい笑みで彼女へ感謝の言葉を送った。
いつもならば嬉しいその言葉も、今の状況では薄っぺらく感じてしまい、グラスワンダーは素直に喜べない。
「……お食事が済みましたら、先に失礼させて頂いても？　今日はあいにく日直なので、早めに教室へ行かないといけないんです」
「そうですか。それは残念ですね……一緒に登校したかったのに。ですが仕方ないですね。朝食の時間だけでも共に出来て嬉しいと思いましょう」
「……はい」
自分は浮気をしておいて良くもまあ……と内心思ってしまうグラスワンダーだが、ひとつあることに気がついた。
それは――――
（ヒトメスの匂いが全くしませんね……）
――――昨日あれだけ密着していたのに、彼からは自分以外の異性の

匂いがしなかったのだ。
ウマ娘の嗅覚は犬程ではないが、人間より敏感。なのにそれを持ってしても、匂いがしないのだ。
しかし確かに昨日、グラスワンダーはトレーナーの匂いを嗅いだし、見間違っていない。
トレーナーが自分にバレてはいないと心底思っているのか、はたまた昨日念入りに風呂で洗い流したか。
グラスワンダーは少々困惑しつつ、トレーナーが食べ終えた食器を洗ってから一足先に学園へと向かった。
◇
「グラスちゃん、大丈夫？」
「話ならエルたちが聞きマスヨ？」
「グラスちゃんにはお世話になったし、セイちゃんのことも頼ってくださいな」
「懲らしめるなら私の家の影を動かしてあげるわ」
教室でいつものメンバーから優しく声をかけてもらうグラスワンダー。
しかしグラスワンダーは今朝のトレーナーの様子と昨日の様子とで頭がこんがらがっていた。
「……」
『グラス（ちゃん）（さん）？』
「あの、浮気するくらい器用な人が、私と遭遇するかもしれないところで浮気相手とデートなんてするものなのでしょうか？」
グラスワンダーは浮かび上がってきた疑問をそのまま友達たちに投げかける。
みんなは『うーん』と悩んだ。
そこへセイウンスカイのウマホにピコンとメッセージが届いたことを知らせる。
彼女がそれを開くと、
「ねぇ、これってグラスちゃんのトレーナーさんだよね？」
セイウンスカイは自身のトレーナーから送られてきた写真を見せ

た。
　そこにはグラスワンダーのトレーナーを始め、数人のトレーナーがうまぴょい伝説を踊っている場面が写っている。
「……」
「なして？」
「昨日確かにエルたちはグラスのトレーナーさんを見たのに！」
　グラスワンダーは当然のこと、浮気現場を目撃した二人も困惑の色が強い。
「証拠もあるなら浮気ではないってことじゃない？」
「でも、グラスがトレーナーさんを間違えることなんて有り得マセン！」
「それに私もエルちゃんもちゃんと見たもん！」
「私のトレーナーさんも昨日はグラスちゃんのトレーナーさんと先輩トレーナーさんの結婚式に参加してたのは知ってるし、この写真が送られてきたのも分かるんだけど……ならグラスちゃんたちが見たのはドッペルゲンガーとか？」
　ドッペルゲンガーとは、自分自身の姿を自分で見る幻覚の一種で、自己像幻視とも呼ばれる現象。　自分とそっくりの姿をした分身。
　第二の自我、生霊の類……のことである。
「……もう埒が明ませんね。お昼になったら直接トレーナーさんを問い質します」
　グラスワンダーが静かにそう言うと、他の四人は背筋が凍り、それ以上は何も言えなかった。
　しかし皆同じだったのは、グラスワンダーを怒らせてはいけないということ……。
◇
　午前中の授業が終わり、昼休みに入る。
　グラスワンダーは物凄い早歩きで、トレーナーが待つ噴水がある中庭へ急いだ。
「……お待たせしました」
「いえいえ、待ってませんよ」

相変わらずトレーナーは柔らかい笑みを向けてくる。
グラスワンダーは大きく深呼吸し、
「トレーナーさん、昨日駅前にいましたか？　私以外の女性と」
疑念をそのまま口にした。
「……駅前？　いえ、私は先輩の結婚式に参加してましたよ。セイウンスカイさんのトレーナーさんも一緒でしたから、何か疑っているのでしたら彼に確認して頂ければ――」
「私がトレーナーさんのことを間違えるはずないんです！」
トレーナーの言葉を遮り、声を荒げるグラスワンダー。困惑するトレーナー。
しかしトレーナーはハッとして、
「無実を証明させてください」
とグラスワンダーに告げてから自分のスマホで電話を掛け始めた。
『もしもーし、珍しいな、どしたん？』
「どうしたはこっちの台詞だよ。いつの間にこっちに来たの？」
『え、なんでバレた？』
「昨日、僕の愛バが兄さんのデート風景を目撃したそうでね」
『へぇ、良く分かったな！　声をかけてくれれば良かったのに！』
「兄さんのせいで僕は浮気の疑いをかけられてるんだけどね？」
『え、それマ？』
「本当だよ。だから兄さんから説明してくれないかな？」
『え、それマ？　義妹になる子とのファーストコンタクトが釈明ってマ？』
「いいからしてくれないかな。兄さんのせいで彼女と別れることになったら、一生恨むよ？」
『……分かった』
そしてトレーナーは音声をスピーカーにしてグラスワンダーの方へと向ける。
「僕の兄さんだよ、グラス」
「……もしもし？　トレーナーさんのお兄様、ですか？」
『はいはい、君のトレーナーの双子のお兄ちゃんだよ。未来の義妹よ』

「双子……？」
『そ、双子。んで、実家の人参農家継いでるんだ。実は今恋人と旅行でウマ娘レースを観に府中まで来ててさ。昨日君が見たのはその時の俺ってこと。アンダスタン？』
「……なるほど……双子だから、匂いも同じだったんですね」
『匂いが同じとか良く分かんねぇけど、似てはいると思うよ。一卵性双生児だから。因みに俺は右利きだけど、弟は左利き。周りが間違えないように一人称とか話し方変えてるよ。ウマ娘ちゃんだと側にいれば匂いも若干違うって分かるんじゃね？』
「……そうですか」
『疑い晴れた感じ？』
「ええ、お手数おかけしました……」
『いやいや、こっちこそなんかごめんね？　弟、バリクソ君のこと好きだからさ。俺のせいで君に振られたら俺の命無くなるんだわｗｗｗ』
「兄さん、もう切るよ。ありがとう」
『え、ちょｗｗｗ　マ――――』
　通話を切ったトレーナーは小さくを息を吐いて、グラスワンダーへ視線を向けた。
「分かってもらえました？」
「はい。疑ってしまってすみませんでした」
「頭を上げてください。兄はあの通り、ちょっといい加減な性格をしているので、グラスに紹介するのも躊躇っていたんです」
「面白いお兄様でしたね」
「性格が似なくて良かったと心底思ってますよ」
　やっと本来の柔らかい笑みに戻ったグラスワンダー。
　しかしグラスワンダーとしては、トレーナーのことを信じ切れなかったという罪悪感が募ってくる。
「私がトレーナーさんを疑ってしまうだなんて……一生の不覚です」
「本気で演技したら両親も私たちを見分けられませんから。そう思い詰めないでください。誤解は晴れた訳ですし」
「でも……」

「では、罪滅ぼしに今日のお昼はグラスが食べさせてくれませんか？
せっかくの記念日ですし、グラスは二人きりでないとイチャイチャしてくれませんから」
「もう……ズルいですぅ♡」
そんなことを言われては、いくら大和撫子を志すグラスワンダーでも端なくイチャイチャしたくなってしまう。
「元はと言えば、私の責任ですから」
「お兄様に話していたように『僕』でいいですよ？♡」
「では今後はそのようにしますね」
「はい……その方がより親しみ深くなった気がします♡」
「僕はグラス一筋です」
「はぅ……いけません。顔が火照ってしまいます……」
「僕の愛バは世界一かわいいです」
「にゃぅ……♡」
「抱きしめてもいいですか？」
「……はい♡　私は貴方だけの愛バですから♡」
こうして疑いは晴れ、グラスワンダーはよりトレーナーとの愛を育むのであった。
当然、彼女を心配していたスペシャルウィークたちにその様子は物陰からバッチリ見られていたという。

日本総大将の二つ名は伊達じゃありません！

「う～～～～ん」
　中庭内にあるベンチで、バレーボールサイズのおにぎりを持ちながら唸るのは、日本総大将ことスペシャルウィーク。
　彼女は今、悩んでいる。とてもとても悩んでいるのだ。
「う～～～～ん！」
「スペ先輩、そんなに悩んでどうしたんですか？」
「う～～……あ、スカーレットさん！」
　そこへ声をかけてきたのは、後輩であるダイワスカーレット。
　彼女の手にもお弁当箱の包みがあり、これからお昼。
「スカーレットさんもお昼ですか？」
「はい。天気も良かったので、せっかくだからこっちに来たんです」
「今日はいい天気ですもんね！　私もそんな感じです！」
「それで、何か悩み事ですか？　食べながらで良かったら聞きますよ？」
「え、でも……」
　ダイワスカーレットの心遣いにスペシャルウィークは申し訳なさそうにするが、後輩から「ただのお節介ですから、気にしないでください♪」とまで言われてしまえば、頷く他ない。
　なので隣に座ったダイワスカーレットに自分の今抱えている悩みを素直に話すのだった。
◇
「なるほど……つまり、同級生が自分の担当トレーナーと上手くいってるのに、自分はこのままでいいのかってことですね？」
「そう！　そうなんです！　みんなあの手この手で担当のトレーナーさんと仲良くなってるのに、私は特にこれといって何も出来てなくて……」
「えっと、参考になんですけど……スペ先輩って担当トレーナーとどういう関係なんです？」

「え!?　えっとぉ……そのぉ……お付き合いしてます……えへへ」
（可愛いなこの先輩……）
　はにかみながらも幸せそうに言うスペシャルウィークを見て、ダイワスカーレットは思わず胸がキュンとする。
　普段は明るく礼儀正しい彼女が今はただただ恋する乙女なのだから、それも当然だ。
「えっと、じゃあ、付き合ってどれくらいなんです？」
「今月で2ヶ月です！」
「うわぁ、じゃあまだまだラブラブですね♪」
「そうですかねぇ……確かに頭を撫でてもらったり、指を絡めるように手を繋いで寮まで送ってもらったりしてますけどぉ」
「いい感じじゃないですか♪　ならそんなに焦る必要ないんじゃないですか？」
「そう言われればそうなんですけどね。でも……」
「でも？」
「私ね、重いかもしれないですけど、自分のトレーナーさんと結婚したいんです。だからもっともっと仲良くなりたいし、トレーナーさんのことなら全部知りたいんです」
　スペシャルウィークの気持ちにダイワスカーレットは「なるほど」と頷く。
　スペシャルウィークだけでなく、自分の担当トレーナーとバ生のゴールインを夢見るウマ娘は多い。
　自分の夢を共に背負い、その夢を実現させる手助け、または実現させてくれた相手となれば担当云々を抜きにしても女の子なら惚れてしまう。
　ダイワスカーレットに至っても全く同じ気持ちなので、特に共感出来るのだ。
「重くなんてないですよ！　寧ろ惚れるなって言う方が無理ですし、結婚したくなって当然ですよ！」
「で、ですよね！」
「はい！　トレーナーがいなかったら、トレーナーが支えてくれたか

ら、自分のトレーナーがあの人だったから、今の自分があるんですから！　自分のプライベートの時間とか全部アタシに捧げてくれるんだもの！」
「え、スカーレットさんも、自分の担当トレーナーさんのことが？」
「あ……えっと、まあ……はい……」
つい勢いでスペシャルウィークのことではなく、自分のこととして力説してしまったダイワスカーレット。
頬を赤く染めて恥じらう乙女を目の当たりにし、スペシャルウィークは「おぉ～」と感動してしまう。
まさか同級生だけでなく、後輩にも自分と同じような気持ちを持っているウマ娘がいると知ったからだ。
「スカーレットさんは担当トレーナーさんとお付き合いしてどれくらいなんですか？」
「アタシですか？　付き合ってませんけど？」
「え？」
当然付き合っているとばかり思っていたのに、まさかの返答でスペシャルウィークは思わずポカン顔を晒してしまう。
対してダイワスカーレットの方はスンッと表情が抜け落ちており、瞳の奥はそれを物語るように混沌としていた。
「アタシ、自分のトレーナーと付き合ってませんよ？　付き合ってるように見えました？」
「えっと……その……」
「いいんです。良くクラスの子たちからも訊かれますから。でもアタシ、素直じゃないから……」
「スカーレットさん……」
「でも、いつかは付き合う気満々ですから！　ですから、既に付き合ってるスペ先輩は周りなんか気にせずにどっしり構えていればいいと思います！」
ダイワスカーレットらしい激励にスペシャルウィークは強く頷いた。
こんなに相手のことが好きでも付き合えていない子もいる。なら

ば自分はとても進んでいるんだし、焦る必要もないのだと。
「ありがとう、スカーレットさん！　私、トレーナーさんと結婚出来るようにけっぱるね！」
「はい、応援してます♪」
スペシャルウィークはダイワスカーレットのお陰で元気を取り戻し、おにぎりを満面の笑みで頬張るのだった。
◇
放課後になり、担当トレーナーを持つウマ娘たちは担当が使うトレーナー室へと向かう。
その頃、スペシャルウィークのトレーナーは同期トレーナーと意見交換のあとで他愛もない雑談をしていた。
「つかお前さ、最近太ってきてない？　ワイシャツパツパツじゃん」
「あ～、スペに付き合って最近は色々と大食いチャレンジ巡りしてたからな～」
「相変わらずお前は担当バに甘いなぁ」
「いやぁあの幸せそうに食ってるとこ見てるとこっちまで幸せになっちまってなぁ」
「まあそういう子が好きなのはいいけどよ――――」
そんな話をしている間に、スペシャルウィークがトレーナー室の前までやって来る。
（あれ、トレーナーさん以外の人の匂いがする。トレーナーさんのお友達かな？）
もしそうだったら挨拶しなきゃ、と考えていたスペシャルウィークの耳に、
「自分（健康面）のこと考えて、（大食いチャレンジ）付き合うのはやめろよ」
名も知らぬトレーナーの友達（仮）の言葉が聞こえ、彼女の思考は

停止した。
更に、

「確かにそうだよな……」

愛するトレーナーの言葉にスペシャルウィークは絶望する。
「……やだ」
小さくつぶやいたスペシャルウィークは、ジャパンカップを前にしたような迫力を纏った。
そして勢い良く扉を開ける。
「お、噂をすれば……っ!?」
同期トレーナーは殺意が込められた鋭利な眼差しに圧倒され、腰を抜かした。
当然、彼女の異様さに驚いたトレーナーは即座に「どうした、何があった?」と声をかける。
「……答える前に、ソレ、潰してもいいですか?」
絶対零度の眼差しで人をソレ呼ばわりするスペシャルウィーク。
「何バカなこと言ってるんだよ。ダメに決まってるだろ。ホントどうしたんだよ」
「……トレーナーさんが私と付き合うのやめるって……ソレが付き合うのやめろって……」
「え、ああ、聞いてたのか。それでそんなに怒ってるんだな」
「……トレーナーさんは落ち着いてますね。トレーナーさんにとって、私はその程度のウマ娘だったんですね。トレーナーさんのことは大好きですけど、流石にショックです」
「スペは俺の愛バで、大切な恋人だ。一度たりともスペのことを軽く考えたりしたことは三女神に誓ってないぞ」
「嘘です!!!」
物凄い声量にトレーナーは尻もちをついた。

そんなことお構いなしに、スペシャルウィークはトレーナーの方へズンズンと迫っていく。
「や、止めろ、スペシャルウィーク！　トレーナーへの暴行は重罪だぞ！」
同期トレーナーが己を奮い立たせてスペシャルウィークを注意すると、彼女は壊れたブリキ人形のようにぐぎぎぎと同期トレーナーの方へ首を回した。
そして目だけで『お前が原因なんだぞ』と更に殺意を強める。
「わ、分かった！　スペ！　お前との大食いチャレンジ巡りはこれからも続けるよ！　でも俺は普通のメニューにするのだけは分かってほしい！」
トレーナーがスペシャルウィークの腰に縋るように抱きついて叫ぶと、
「……ふぇ？」
殺意がスッと引っ込んだ。
それだけでトレーナーも同期トレーナーも『助かった……』と安堵し、互いに状況を整理するのだった。
◇
「……」
スペシャルウィークは羞恥に見悶え、トレーナーは苦笑いする。
「まあ誤解が解けて良かったよ」
「良くありませんよぉ～」
「アイツも笑ってたしいいじゃないか」
「良くないですぅ～」
ひぃ～ん、と声をあげて首まで真っ赤になるスペシャルウィーク。
誤解だったとはいえ、愛するトレーナーと同期トレーナーにとんでもないことをしてしまった。あのまま誤解が解けなければ、自分は確実にトレーナーを担いで北海道の実家へ帰っていたからだ。
「誤解させて悪かったな、スペ。でも安心してくれ。俺はずっとスペの隣にいるから」
「はいぃ……」

「まあ将来的な話として、トレーナー業を辞めるのは確かだしな」
「将来的、ですか？」
　スペシャルウィークが小首を傾げながら言うと、トレーナーは照れくさそうに頬を掻く。
「だから、ほら……スペは将来、実家の牧場継ぐんだろ？」
「はい」
「するとだ、中央からまた実家へ戻るんだろ？」
「そうですね」
「……だぁ！　もう！　そこで天然発揮するなよ！　いや、天然だからか!?　天然だからだよな！　くっそー！」
「ええ!?」
　突然喚き散らすトレーナーにスペシャルウィークが困惑する中、
「だから！　その時は俺もスペと一緒に北海道に行くってことだよ！　三十路前の男が女子学生にプロポーズしてるんだよ！　分かってくれ！」
　もうどうにでもなれという感じではあるが、彼女の肩をガッチリと掴んで叫ぶようにプロポーズされる。
　甘い雰囲気もそれらしい流れもないが、彼女の天然発言や天然行動に翻弄されるのはいつものことだ。
　故にプロポーズされているとやっと気付いてあたふたしているスペシャルウィークを見つつ、トレーナーは『これが俺たちらしいよな』と苦笑いしてしまう。
「で、お返事はどうかな。俺の愛バさん？」
「あぅ……えっと……そのぉ……お嫁さんにして、ください♡」
「この場合、俺が婿入りなんだよなぁ」
「ああ、そうでした！　じゃあ、えっと……私のお婿さんになってください！♡」
「ああ、一生大切にさせてくれ」
「はい……っ♡」
　スペシャルウィークは感極まってトレーナーに抱きつくと、トレーナーも優しく背中に手を回し、彼女は子どものように何度も何度も大

好きな彼の胸板に顔を擦り付けた。
◇
次の日のトレセン学園。
スペシャルウィークが通う教室で、
「はわぁは～～♡」
彼女はまだ昨日のことで夢見心地だった。
同室のサイレンススズカも困惑するくらいに。
「スペちゃんがいつも以上にポワポワしてマース」
「何かいいことでもあったんじゃないの？」
「いつものことだと思うけれど……？」
「幸せそうなら良いではありませんか♪」
エルコンドルパサーを始め、仲良し組はそんなスペシャルウィークを訝しむ。乙女センサーは実に敏感だ。
「スペちゃん、何かいいことでもあったんデスカ？」
「あ、エルちゃん！　えへへぇ、分かっちゃう？♡」
「なんだかいつも以上にウザいデース」
「エルちゃんひどーい♡　私はトレーナーさんにプロポーズされて幸せなだけなのにぃ♡」
「ケッ!?」
まさかの爆弾投下にクラスは騒然とする。
唯一涼しい顔をしているのは、
「私は結婚を前提にと指輪を頂きましたので、交際をお受けしました♡」
グラスワンダーのみ。
ここで張り合ってくるのは大和撫子らしからぬ行為だが、グラスワンダーにとっては負けられない戦いなのだろう。
当然、グラスワンダーの発言にもクラス中が騒然とし、
「私もトレーナーさんと結婚の約束してくるデース！」
「何とかしてプロポーズしてもらわないと……」
「にぃにには私と結婚する権利をあげてるから、そろそろかしら？ふふふっ♡」

仲良し組は大いに掛かるのだった。

一番を譲る気なんてないんだから！

この日、ダイワスカーレットは超絶ご機嫌であった。
何故なら自身が愛して止まぬトレーナーが、家に招いてくれたから。
ＵＲＡファイナルズで優勝し、ミスパーフェクトとまで評価されたことで、その担当であるトレーナーにも多額の給料が支払われた。
そこでトレーナーはこれまでお世話になったトレーナー寮を出て、駅前に建てられた新築のマンションに移り住むことに。
最近やっと荷解きが終わり、部屋に人を呼べる状態になったので、その記念すべき第一客人としてトレーナーは愛バであるダイワスカーレットを招待したのだ。
（新居にアタシを一番に招待するだなんて、トレーナーも分かってるじゃない……ふふん♪）
一番という響きに、それも大好きなトレーナーの一番ということで、ダイワスカーレットはウキウキのルンルンで自然と鼻歌も交じり、尻尾も揺れる。
特別に駅前の人気が高いケーキ屋でトレーナーへのお土産も買った。特別に予約してその店で一番人気のニューヨークチーズケーキだ。
そしてあわよくば『あーん』したり、『あーん』してもらったり出来たらいいな、と乙女な思惑もあったりする。
しかし――――

「……で、これは何？」

――――トレーナーの新居でダイワスカーレットはそんな甘酸っぱいこととは掛け離れた状態になっていた。

彼女は居間にあるソファーに腰を下ろし、足を組む。
対してトレーナーはテーブルを挟んで向かい側にある一人用ソファーに座ってポカン顔だ。
「？　何って……何が？」
今ある状況が理解出来ずにいるトレーナーを前に、ダイワスカーレットは思わず大きくため息を吐く。
「だ・か・ら！　コ・レ・は・ナ・ニ!?　って訊いてるのよ！」
なので分かりやすいように、テーブルに並べたブツを指差して言った。
何故彼女がここまで機嫌を損ねているのか。
それは――――
「え？　元カノから貰ったやつだけど？」
――――トレーナーの元恋人が交際期間中に贈った品々であるから。
トレーナーとその恋人は当然今は付き合っていない。
付き合っていたのはトレーナーがダイワスカーレットと担当契約を結ぶより前の頃。
別れたのは彼が本気でトレーナー業に専念する上、恋人の方もまた仕事でもうワンランクアップするための勉強で忙しくなっていた。
なので今後のお互いのことを考えて話し合ってそうなった。
どちらかに何かしらの問題があったわけではなく、今もたまに互いに仕事の愚痴を言い合う仲だったりするのだが、今の今までトレーナーに恋人がいたことも知らなかったダイワスカーレットにとってはもやもや感が募る。
（そもそもアタシとトレーナーはつ、付き合ってないけど、なんで別れた恋人から貰ったものを今でも後生大事に持ってるワケ!?）
悶々としつつ、足を組み直すダイワスカーレット。
「……アンタの一番って誰？」
「？　勿論、スカーレットだよ。俺は君に出会わなかったら、チームまで任されるトレーナーになれなかった。だからスカーレットが俺の一番のウマ娘だ」
「っ……そ、そう！　そうよね！」

当然のように一番欲しい言葉を返してくれたことで、ダイワスカーレットは思わず耳がピコピコと揺れる。
しかし彼女はトレーナーの中で『一番の異性』でありたいのだ。
トレーナーが元カノから貰ったと言って置いてあるものは、案外多い。
トレーナー好みのマグカップや湯呑茶碗はまだいい。しかし中には明らかにトレーナーでは選ばない色のペンやらネクタイピンやらカフスボタンがあるところを見ると、ダイワスカーレットは緩んだ口元をまた引き締め直す。何より彼に似合っていたのが更に不満感を掻き立てるのだ。
そもそもトレーナー自身も気兼ねなく『そういやこれ、元カノから貰ったやつなんだよな』なんて言い出さなければ、こんなことにはならなかった。
「ねぇ、本当にその人と円満に別れたのよね？　アンタがそう思ってるだけで、向こうにアンタへの未練があったりとかないわよね？」
「ええ？　いやいやないよ。この前も一緒に食事行ったけど、お互いの近況を報告し合ったくらいで……あ、そういえばスカーレットが俺に絶対気があるから、早くその気持ちに応えてあげたらって言われたな」
「ブーーーーーッ!!!?」
思いもよらぬ言葉にダイワスカーレットは飲んでいた紅茶を思い切り噴き出した。
「うわっ、おい、新居なのに！　なんだ？　ウマ娘界隈では新居祝いでお茶を思い切り噴き掛けるのが習わしなのか!?」
「ゴホッゴホッ……ご、ごめんなさい。変なこと言われたから、つい……」
幸い口に含んでいたのは少量だったので、台布巾で軽く拭き取る程度で済んだ。
しかしダイワスカーレットはそれ以上に動揺している。
（なんで!?　なんで会ったこともない人にアタシがトレーナーのこと好きなのバレてるの!?　しかもアタシのアプローチも分かってるだ

なんて！）
　まさか会ったこともない人間からそう取られているとは思いもしなかったダイワスカーレット。
　しかし彼女のトレーナーがにぶにぶトレーナーというだけで、実はトレセン学園中のウマ娘たちが彼女の恋を応援している。それはチームメイトのウマ娘たちもだ。
　ダイワスカーレットは無意識だったが、ＵＲＡファイナルズ優勝後の密着取材時に何度もトレーナーの左腕に抱きついていたし、恋人繋ぎもしていたし、尻尾も常にトレーナーの体のどこかに当てていた。
　この様子はしっかりと取材記事の写真に載っている。
　ただどうしてトレーナーもダイワスカーレットも騒がなかったのかというと、トレーナーはダイワスカーレットからのスキンシップは元から強めだと思っていたので『ああ、この子もやっぱまだまだ大人に甘えたい年頃なんだ』と考え、ダイワスカーレットの方は『これくらい仲良い友達と良くするし』程度の感覚なのだ。
　なので周りから見ればこれで付き合っていないのが理解出来ないレベル。
　同室のウオッカなんかはダイワスカーレットがトレーナーのことでやきもきしていると、『なんだコイツ……』と思いつつ適当に相槌を打つのみだ。
（元カノがトレーナーをまだ狙ってるとか勝手に決めつけて勝手にヤキモチ焼いて付き合ってもいないのに問い詰めてたのアタシは!?）
　そう思い至り、今度はなんとも言えない恥ずかしさに顔や首を真っ赤にして身悶えるダイワスカーレット。
「だよなぁ。スカーレットが俺のこと好きとかないよな。好きは好きでもライクだってのにさ」
「……そうね」
「？」
　真っ赤にしていたかと思えば、今度はスンッと表情に影を落としたダイワスカーレットにトレーナーは首を傾げる。
　確かにトゥインクルシリーズを終えてからも、彼女は何かと自分と

行動を共にしたがった。
お昼休みは自分やトレーナーに用事がない限りほぼトレーナー室へ二人分の弁当を持ってやって来るし、休日も基本はどちらかの予定に合わせて行動する。
しかしトレーナーとしては、それは彼女と担当契約を結んでから続けている習慣みたいなものになっているので、彼女からの好意だとは全く思っていない。
これにはダイワスカーレットがなかなか素直に言葉に出来ていないのも原因の一つだが、トレーナーの鈍感力も大きく関わっている。
だからこそ、ダイワスカーレットは未だ自分の好意が伝わっていないことにショックを受けた。
（なんで……どうしてよ……アンタはずっとアタシの一番なのに……なんでアンタはそうも無自覚でいられるの？）
素直に言葉に出来なくても自分はこれまでトレーナーにあらゆる行動で、自分の気持ちを伝えてきた。
お弁当もそうだし、互いの予定を確認し合ってお出掛けという体でデートにも誘っている。お弁当に至っては料理の練習という体で毎回彼が喜んでくれる顔を想像しながら作り、それだけで幸せな気持ちになる。
それにダイワスカーレットにとっては心を許した相手にのみ許している髪の手入れも尻尾のケアも任せ、更には耳掃除も任せているのだ。
故に周りからすればダイワスカーレットが隠しているつもりでも、自身のトレーナーにぞっこんなのはハルウララでも分かる。
そもそもトレーナーが他のウマ娘を見ていれば、彼女は必ずと言っていいほどに彼の背中に頭や顔を押し付けて構ってアピールをしているし、タイムが良ければ頭や首を撫でるよう言っているのだ。
「どうした、スカーレット？　怖い顔になってるぞ？　俺なんかしちまったのか？」
「……別に」
不安そうに訊ねてくるトレーナーに彼女は無愛想に返して、出され

た紅茶を啜り、乱暴にケーキを口に運ぶ。
「スカーレット……」
「？　何よ――ッ!?」
突然、ダイワスカーレットはトレーナーに顎を軽く持ち上げられた。
所謂顎クイ。乙女なら一度は夢見るシチュエーションであり、ダイワスカーレットもその一人だった。
（え、え？　な、何よ……急に。そんな真剣な表情でアタシの顎持って……ま、待って！　嬉しいわ！　嬉しいんだけど、まだ心の準備が！
ママには男性の部屋に入ったら油断しないように言われてたけど、まさかトレーナーがこんなに積極的になってくれるなんて！　やっぱり、いつものスカートより短いスカートだったのが良かったのかしら？　それとも普段の服のサイズをちょっと小さめにして体のラインを強調したのが気に入ってくれたのかしら？　大丈夫。大丈夫よ、アタシ！　今日は可愛い下着だし、何より脱がせやすいのにしてきたもの！）
掛かりに掛かったダイワスカーレットは、これを脳内でたったの一秒という速さで思考する。
しかし――
「クリーム付いちゃってるぞ……ったく。ほい、取れた」

――現実は残酷であった。
「……ふぇ？」
「？　取れたぞ？　あとケーキはちゃんとフォークで食べること」
「……うん、ごめん」
スンッとまた表情が無になるダイワスカーレットは、先程のときめきを誤魔化すように、トレーナーの鈍感さへの憤りをぶつけるように、ケーキをフォークで串刺しにすると、大きな一口で頬張った。

ムシャムシャ……ムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャ
ムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャ
ムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャ
ムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャ！

彼女は気が付いたら持ってきたケーキをすべて食べてしまってい
た。

◇

「……………」

「大丈夫か？」

ウマ娘でも胸焼けはする。

ダイワスカーレットも他のウマ娘同様、胃は人間に比べて丈夫では
あるが、流石に8号という大きなワンホールケーキを食べてしまえば
こうなるのも仕方がない。一部例外はいるが。

唯一の救いは上質な物だったので、辛さが少ないことだろう。

「………ッ」

「え？」

トレーナーは次の瞬間目を見開いた。

何故なら、

ダイワスカーレットが大粒の涙を流して泣き始めてしまったから
だ。

「うぅっ、グスッ……うわぁぁぁぁぁんっ！」

彼女のこのような涙は、自分と担当契約をするかしないかの時に見
たのみ。

トレーナーは訳も分からず、彼女を落ち着かせようと手を伸ばす
が、

「やめてッ！」

その手をダイワスカーレットが拒絶する。

「スカーレット……」

「やめてよ！　優しくしないでよ！　アンタはいっつもそう！　鈍感
で！　マヌケで！　なのにいつもアタシがその時欲しい言葉をくれ
る！　格好良くて！　頼りになって！　アタシの一番のトレーナー

になって！　どこまでアタシを勘違いさせたら気が済むのよ！　アタシはアンタの……アンタの中で一番の女のコじゃないと嫌なのよ！」
「……」
「……ゴメン。アタシ帰るから……ゴメン、ナサ――――んんうっ!?」
立ち上がろうとした瞬間、ダイワスカーレットはトレーナーから強引に引き寄せられた。
普段ならすぐにその距離を離すことは可能だったが、今は状況が違う。
何故なら、
「んっ……ちゅ、んんぅ、ちゅっ……んぅ」
トレーナーにキスされていたからだ。
最初は驚いたダイワスカーレットだが、それが一番の男性からのキスだと分かると、瞼を閉じて彼の胸元の服をキュッと掴む。
ドラマや映画で見たことがあるような、唇同士を軽く合わせるだけの優しいキスではない。
ただただ彼にされるがまま、ダイワスカーレットは彼の舌に口内を蹂躙される。
彼女はそれが嬉しかった。そういうムードも何もない、唐突なファーストキスなのに、一番の男性にされるこの荒々しくも自分へ対する愛情が注がれているという実感が、とても心地良く、嬉しかったのだ。
「んっ、んんぅ……っはぁっ……はぁ～っ、はぁ～っ……♡」
トレーナーの唇が離れ、肺一杯に空気を取り込む。
走ってもいないのに、ダイワスカーレットは有馬記念を全力疾走した時のように肩で息をしていた。
「ちょれぇにゃあ……？♡」
呂律が回らないダイワスカーレットは、一生懸命一番の男性のことを呼ぶ。
すると彼は微笑んでから、もう一度キスをした。今度は優しく。
「んむぅ……にゃ、にゃに、すゆのよぉ♡」

「……見事なまでにフニャフニャになってるな」
「う、うるしゃいわにぇ……♡」
「スカーレットが卒業するまではって思ってたけど、あんなこと言われたら無理だった」
「うしょ……♡」
「嘘じゃない。今までは鈍感なフリをしてたんだ。というか、中等部の女子学生に手を出す社会人ってやべぇだろ、普通に考えて」
「……うゆぅ♡」
それでもキスまでしてしまったトレーナーはダイワスカーレットを離そうとはせず、何度も何度も彼女の頭や髪を優しく撫でていた。
◇
辺りが暗くなってきた頃――
「へぇ、トレーナーってアタシのことが一番好きなんだぁ？♡　ふーん♡　へぇー♡」
「……もうこのやり取り何度目だよ……」
――ダイワスカーレットはその瞳の奥にハートマークを浮かべながら、トレーナーの膝上に横抱きさせるように居座り、何度も何度も『ねぇ、トレーナーの一番の女のコって誰？♡』と訊ねている。
その度にトレーナーはダイワスカーレットだと答え、その度に彼女は破顔し、彼の首筋に頭をグイグイと寄せては胸元に人差し指でクリクリとのの字を書いていた。
幸せの絶頂にいるダイワスカーレット。
まさかトレーナーが今まで我慢して、鈍感を演じていたなんて思ってもいなかった。
一度メーターが振り切れてしまえば、あとは簡単。
今までしたかったことを存分にするのみ。
「いいでしょ、今まで散々な目に遭わされてきたんだもの♡」
「あのな……」
「な、何よ……こんなアタシは嫌なの？　もうアンタの一番じゃないの……？」
世間体の話をしようとしたトレーナーだったが、すぐに掛かってネ

ガティブな妄想に走る彼女にトレーナーはてんやわんやだ。
「違ーう！　だから、俺は、普通に考えて社会人と学生が付き合うのはやばいって言ってんの！」
「え、なんでよ？」
「なんでよって、スカーレットの選手生命とか世間体とか色々あるだろ」
「え、アンタ、トレーナーのくせに知らないの？」
「……何を？」
「ウマ娘って普通の人と成長過程が違うから、アタシの年齢なら付き合っても合法なのよ？　流石に飛び級してるニシノフラワーさんとはそうもいかないけど」
「ゑ？」
「呆れた……それだけのことでアタシはこんなにお預け食らってたの？」
　ダイワスカーレットが言うように、ウマ娘の成長過程は人間とは違う。
　個人差は勿論あるが、殆どのウマ娘は中等部に上がる頃には人間でいうと大学生辺りの成熟度扱いになるのだ。
　故にウマ娘は早くに結婚して次世代のウマ娘を産み、人間と共に繁栄してきた。
「……でもまだまだレース出たいだろ？」
「エアグルーヴ先輩のお母さんは先輩を産んだあとでも走ってたじゃない」
「それはまあ……」
「世間じゃ人とウマ娘の結婚なんて年の差婚が普通なんだから、気にしないでいいと思うんだけど？」
「……」
「やっぱり、アタシはアンタの一番じゃないのね……」
「だぁ～っ、もう！　分かった！　分かったからすぐに自信失うの止めろ！」
「ホントに？　アタシが一番？」

「スカーレットが一番だよ！」
「えへへ、やったぁ♡」
トレーナーは『もうなんかどうでもいいや』という境地に至る。
彼女がこんなに自分とのことを求めてくれているのだから、あとはもう自分が彼女を幸せにすればいいだけなのだから。
トレーナーは観念したように気持ちの整理をつけ、恋人となったダイワスカーレットが満足するまで頭や首を撫でてやった。
ただ寮の門限には間に合うように送ったという。
当然、送って行った時にピッタリとくっついて離れない二人を見た寮のウマ娘たちは、
『スカーレットがトレーナーと付き合ったぞー！』
とお祭り騒ぎになったが、みんなが祝福し、次の日には理事長直々に、
『祝福ッ!!　君たちの歩む先に幸あれッ!!!!』
と祝福され、
『ダイワスカーレット☆ついに担当トレーナーの一番を手にする！』
『ダスカトレーナーは名男優!?　これまでの鈍感発言はすべて演技だった！』
『ビッグカップルの誕生！』
『トレーナーは世間をやきもきさせた責任を取ってダイワスカーレットを一生幸せにせよ！』
等とマスメディアに取り沙汰され、周りからも世間からも祝福されるのだった。
「ねぇ、アンタの一番は誰？♡」
「……スカーレットだよ」
「ふふん、当然よね！♡　アタシが一番！♡」

私の計画に狂いはありません！

エイシンフラッシュ。
ドイツからの留学生であり、日本ダービーと天皇賞秋を勝ち取り、トゥインクルシリーズを駆け抜けた。
当初の予定では3年間の留学だったが、まだ日本で成長出来ると感じたことで両親と相談した結果、もう少し滞在することに。両親も娘の成長を喜び、こんなイレギュラーなら大歓迎とまで言ってくれた。親とは誰よりも我が子の幸せを第一に願うのだから。
「……」
そんな彼女は今、目の前にあるケーキを神妙な面持ちで眺めている。
彼女が今食しているのはザッハトルテ。
ザッハトルテはドイツの菓子と思う人が多いだろうが、実のところザッハトルテはオーストリアが発祥。
「……」
ドイツでもザッハトルテは人気が高く、多くのパティシエたちが作っては、人々に笑顔を届けている。
エイシンフラッシュもザッハトルテは大好きだが、何故こうも神妙な面持ちなのかというと、
「……負けました」
このザッハトルテの作り手が自分の愛して止まないトレーナーだからだ。
エイシンフラッシュのトレーナーは両親がお菓子作りを趣味にしている。
幼い頃から両親とお菓子作りをすることが多く、その腕前は本場の味を知るエイシンフラッシュが脱帽する程。
エイシンフラッシュからすれば、どうしてこの腕を持ちながらウマ娘のトレーナーになったのか不思議に思えるレベルだ。
前にそのことを本人に尋ねてみたが、

『え、お菓子作りはただの趣味だし、趣味を仕事にするのは違うかなって思ったから』
なんて言われた。
トレーナーが今の職に就くきっかけは、幼馴染みのウマ娘が良く走っているのを見ていて、『大きくなったら私のトレーナーになって！』なんて言われたことが大きい。
幼少期の初恋の子からそんなことを言われれば、幼いながらも男は懸命に努力した。
しかしその幼馴染みのウマ娘はアスリートウマ娘にはならず、普通のウマ娘としてのバ生を歩み、今では結婚して二児の母。
今でもトレーナーが実家に帰ると、昔の話やお互いの近況を報告し合う仲だ。
実際問題、同年代のウマ娘にトレーナーになってほしいと言われても、無理な話である。
トレセン学園のトレーナーライセンスを取るには、生半可な努力では取れないし、高等部からの編入にしても一般の男子高校生が取れるライセンスではないから。
しかしトレーナーはあの頃を大切な思い出だと語っていた。
故に現在があり、彼に出会わなければエイシンフラッシュはダービーウマ娘にはなれなかっただろう。
そして何より、初恋が散っていたからこそ、引きずっていないからこそ、自分と恋仲にあるのだから。
ただ、いくら恋仲であっても、ケーキに至っては負ける気がなかったエイシンフラッシュ。
たまたま彼がケーキも作れることを知り、試しに作ってほしいとお願いしたところまでは良かったが、ここまでクオリティの高い物をご馳走されるとは思っていなかったのだ。
（いや、これはこれで有利ではあるでしょう。両親もトレーナーさんのこの腕なら大歓迎なはず……そうですね。計画に狂いはありません）
しかし将来、共にケーキ屋を営む予定であればトレーナーのこのお

菓子作りスキルは嬉しい誤算であることには違いない。
父親の作るザッハトルテとは味も形も違うが、プロの物と比較しても引けをとっていないのだ。
そう考えると段々とその表情には笑みが浮かび、尻尾も耳も上機嫌に揺れ出す。
「……フラッシュさん、ケーキ食べながらなんで百面相してるの？」
「はっ……!?」
そんな彼女に思わずツッコミを入れたのは、同室のウマ娘スマートファルコン。
因みにスマートファルコンもエイシンフラッシュのトレーナーが気を利かせて、彼女の分のケーキも一緒に渡していたので、こうして二人で堪能しているのだ。
「こほん、何でもありません。それより、ファルコンさん的に私のトレーナーさんが作ったこのザッハトルテのお味はどうですか？」
「すっごく美味しいよ！　今度お礼にライブの特等席の隣にご招待するねって伝えて！」
「特等席ではなく、その隣なのですね……」
「だ、だって……ファル子のライブの特等席はいつだってファル子のトレーナーさんの席だって決めてるから……」
恥ずかしそうに両手で頬を押さえながらもじもじするスマートファルコンに、エイシンフラッシュは「なるほど」と頷く。
スマートファルコンもまた恋する乙女。しかしウマドルであるため告白はせずにいるというなんとも難儀な運命を背負っている。
しかし担当トレーナーへの恋慕がだだ漏れなので、周りからは既に付き合ってる認定を受けていたり……。
「ファルコンさんにも気に入ってもらえたようですね。自分で作った物ではないですが、自分のことのように嬉しいです」
「そっか☆　でもホントに美味しい……。フラッシュさんのトレーナーさんのお菓子って美味しいのに滅多に食べられない激レアお菓子だから」
「私と同室で良かったですね♪」

「うん☆　前に話したと思うけど、フラッシュさんからトレーナーさんお手製のクッキー貰って、それをライアンちゃんにお裾分けしたら、ライアンちゃんがメジロ家のお茶会でみんなと食べて、そうしたらすっごく喜ばれたんだよね☆」
「そんなこともありましたね。トレーナーさんのクッキーは確かに美味しいです。真似したくても出来なくて、本人に尋ねたら『我が家の秘密レシピだ』って言って教えてくれませんでした」
「そうなんだ～。でもフラッシュさんはお願いすればすぐ作ってもらえるんだし、いいと思うな！　だって将来を誓った恋人なんでしょ？　おねだりすればすぐにでも作ってくれそう！」
「否定はしません。しかしトレーナーさんの負担も考えて、私からねだるなんてことはしませんよ」
「それもそっか～」
　エイシンフラッシュはもう既にトレーナーが作るお菓子の虜。ガッチリと胃袋を彼に掴まれてしまっている。
　好き過ぎて、結婚してから彼に毎日お菓子を作ってもらって食べさせてもらうなんていう甘い夢を見たくらいだ。
「でもそのあとでちょっと大変だったんだよねぇ」
　スマートファルコンが言う『そのあと』とは、彼女がメジロライアンにエイシンフラッシュトレーナー作のクッキーをお裾分けしたあとのこと。
　彼女が言ったように大変喜ばれたのだが、その味に惚れ込んだメジロ家のご令嬢たちがエイシンフラッシュトレーナーの元に『是非ともまた作っては頂けませんか!?』と直談判しに来たのだ。
「ああ、あの時ですか……本当に驚きましたよ。私はてっきりメジロ家が私のトレーナーさんの手腕に目をつけたのだと思って……」
「あの時のフラッシュさん荒れてたもんねー。持ってたスケジュール帳逆さまだったし」
「恥ずかしい限りです」
「でもそれもあってトレーナーさんから『俺は君だけだよ』なんて言われちゃったんでしょー？☆」

「……はい♡」
あの時の必死な告白を思い出すと、今でも頬が火照るほどに嬉しいエイシンフラッシュ。
メジロ家の白饅頭から『誤解を生んで申し訳ありませんでした』と頭を下げられたが、今になってみればスケジュールを大幅に短縮出来たのだから感謝しかなかった。
「そういえば、今度ドイツに帰国するんでしょ？」
「はい。トレーナーさんと一緒に今後のことを話し合うため、両親も交えて」
「フラッシュさん的には卒業したらもう日本には来ないの？」
「そのことも踏まえて話し合うつもりです。今は学院生として在学中ですが、いずれは私も次の夢に向けての一歩を踏み出さないといけませんからね」
「そっか☆　お菓子作りのことは分からないけど、二人でドイツで修行して、日本で二号店出すとかだったら嬉しいなって思っただけなんだ☆」
「……なるほど」
スマートファルコンの純粋で率直な言葉に、エイシンフラッシュはレースで先頭を差す時のような鋭い眼差しになる。
まさに青天の霹靂と言える一言だったのだ。
そこからのエイシンフラッシュはスマートファルコンとの会話に相槌を打つのみで、脳内ではこれからのスケジュールを組み立て始めていた……。
◇
数日が経った休日。
トレーニングも休みのエイシンフラッシュは、トレーナーが住むアパートに訪れて、共にお菓子作りをしていた。
そして今日、今後二人で歩むスケジュールを報告する。
「トレーナーさん、チョコレートが冷えるまでの間、お話があります」
「ああ、いいよ。何かな？」
ソファーに互いの肩を触れ合わせながら座る二人。

トレーナーは紳士的に彼女の肩を抱き、彼女の言葉を待つ。
「今後のスケジュール確認です」
「ふむ、聞かせてもらおうか」
「はい。まずトレセン学園を私が卒業し、その後は一緒に私の実家へ移り住む予定です」
「そうだね」
「それで、当初の予定ではそのまま私とトレーナーさんで両親の店を継ぐということは覚えていますか？」
「ああ、覚えてるよ。ご両親もわざわざ俺たちのために家具を新調してくれたんだったよね？」
「はい」
頷くエイシンフラッシュにトレーナーは微笑んだまま、彼女の言葉を待った。
「実はその予定を変更したんです」
「どういう風に？」
「当初は継ぐことが大前提だったのですが、修行を経て父から認められたら、日本に戻って日本で二人だけのお店を開きたいんです」
「え……」
まさかの変更点に驚くトレーナー。
しかしエイシンフラッシュは真剣な眼差しで続ける。
「確かにドイツは私の祖国。素敵な思い出が沢山あります。でも――」
エイシンフラッシュはそこで一旦言葉を切り、トレーナーの空いている手を両手で握った。
「――日本は貴方と出逢い、貴方と過ごした素晴らしい思い出がある国なんです。今では私の第二の故郷と言えます。ですから私はこの国で、もっともっと貴方と幸せになりたいんです」
Ｉｃｈ　ｖｅｒｇｅｓｓｅ　ｎｉｅ　ｕｎｓｅｒ　ｅｒｓｔｅｓ　Ｔｒｅｆｆｅｎ♡
あなたと初めて出逢った日を忘れない
ドイツ語の甘い言葉と共にトレーナーにキスをするエイシンフ

ラッシュ。
対してトレーナーは驚きの連続だった。
「……はは、なんか今日は驚かされてばっかだな」
「両親には既に了承を得ています。家具を新調したのは両親が掛かり過ぎていただけなのでトレーナーさんが気にする必要はありません。それにドイツへ戻った際に過ごす部屋ではありますしね」
「なるほど……」
「それで、トレーナーさんのお返事は……？」
不安げに訊いてくるエイシンフラッシュ。
そんな彼女にトレーナーは――
「Ｅｓ　ｗａｒ　ｌｉｅｂｅ　ａｕｆ　ｄｅｎ　ｅｒｓｔｅｎ　Ｂｌｉｃｋ」
――と流暢なドイツ語で返した。
これにはエイシンフラッシュも目を丸くする。
「あの日から俺は変わらないよ。そもそも俺は君と一緒ならどこに行っても幸せだから」
「……っ♡」
エイシンフラッシュは感極まってトレーナーの胸に飛び込んだ。
Ｅｓ　ｗａｒ　ｌｉｅｂｅ　ａｕｆ　ｄｅｎ　ｅｒｓｔｅｎ　Ｂｌｉｃｋ．
あなたに一目惚れした
「幸せになろう。そして周りにも幸せを届けよう」
「はい……はい……Ｉｃｈ（あな）　ｍａｇ（たの）　ａｌｌｅｓ（すべて）　ａｎ（が）　ｄｉｒ（好き）♡」
それから二人で作り上げたチョコレートマカロンは『あなたは特別な人』という意味を互いに贈り合うかのように、美味しく仕上がった。

幸せだね、トレーナー♪

「もうダメだぁ……お終いだぁ……」
ある男はこの世の全てに絶望したように、独りごつ。
「なんだよ急に。なぁに戦闘種族の王子みたいなこと言ってんのさ？」
そこに居合わせる友人が項垂れる男へそんな言葉を返した。
「っ!? やめろ！ 俺は王子じゃない！ 俺はトレセン学園のトレーナーなんだ！」
「いや知ってるし、俺もそうだし」
ここはトレセン学園。
そして嘆いているのはファインモーションの担当トレーナーで、今は同期でエアシャカールの担当トレーナーが使うトレーナー室に来ていた。
友としてはいきなりやって来てこの有様なのだから、もう訳が分からない。
「で、何があったんだよ？」
「聞いてくれるのか？ 俺の話を？」
「聞くまで居続けるだろ。さっさとゲロって帰ってくれ」
「実は昨日――」
（どんだけ聞いてもらいたいんだよ）

――

――

昨日は休日。
トレーナーはもうすっかり休日の恒例となった自分の愛バと共に、ラーメン屋巡りをしていた。
店をはしごすること六軒。このあともはしごする予定のため、小休憩で偶然見つけた路地裏の鶏ガラ醤油が自慢のラーメン屋で愛バが愛らしくラーメンを啜る姿を三女神に感謝しながら見ていた時、

『あ、ねぇねぇ、トレーナー』
愛バに声をかけられた。
『どうしたの、ファイン？』
『あのね、キミに見てほしいものがあるの♪』
『へぇ、何かな？』
『実家から送られてきたアルバム♪』
ジャーンと可愛く効果音を口にしながら、ファインモーションは高級感溢れるグリーンの布製フォトブックをスッとどこからともなく現れたＳＰから受け取り、トレーナーに手渡した。
『え、俺も見ていいの？』
『もちろんだよ♪　キミには私の全てを知っていてほしいから！』
『ありがとう。じゃあ、拝見させてもらうね』
『どうぞー♪』
重厚感溢れる表紙を捲ると、早速王妃様に抱えられて穏やかに眠る生後間もない愛バの写真があり、トレーナーは無意識の内に涙を流していた。
こんなにも神々しい光景がこの世に存在するだろうか？　レオナルドやミケランジェロ、ドナテロ、ラファエロが手を組んだとしても、ここまでの芸術作品を生み出すことは出来ないだろう。
神よ……本当にあなたという御方は在られたのか。
『うふふ、トレーナーったら大袈裟ね……そう言ってくれるのは嬉しいけど♡』
『あれ、俺声に出してた？』
『うん♡』
にこやかに頷く彼女もまた、女神と間違え……いや、女神のような美しさ。
トレーナーは涙を拭いながら、次のページ、また次のページと捲っていく。
すると、
『？』
何やらアイルランド語で手紙のようなものがあった。

アイルランド語は読めないが、それがアイルランド語なのだとはファインモーションがたまに両親から手紙を貰ったと読み聞かせてくれるのでなんとなくはトレーナーも理解している。
トレーナーが手を止め、小首を傾げた瞬間――

『あ、見ちゃった？♡』

――女神が微笑んだ。
まるで長きに渡る戦いで勝利を勝ち取った戦いの女神モリガンのように。
『あ、見ちゃまずいやつだった？　ごめんね？』
『ううん。そんなことないよ。将来的には良く目にすることになるものだからね』
『？』
『それ、私の国の機密文書なの♪』
『へぇ……？』
『私ね、今まで自分が望んだモノって与えられなかったことないんだ』
『そりゃあ、そうだろうね』
『だから、ね？』
ファインモーションが何を伝えたいのかイマイチ分からないトレーナーだったが、
『この前のオフに腕を組んでＳＰに写真を撮ってもらったよね？♡
あれ、もうアイルランドの外務省が明日に全世界へ向けて発信しちゃう予定なの♡　既に報せを受けた日本政府はもう祝辞をお父様に送ってるよ♡　あ、因みにアイルランドから特派員が来てて既に私たちのラブラブなところが祖国では大々的に宣伝されてるし、祝福ムード一色だから安心してね♡　あとあと、アイルランドって日本で漢字表記にすると愛なんだって♡　なんか幸せだよね♡　それで、あとはキミが素直になればいいだけだったから、ちょっと手荒い手段になっ

ちゃったけど……いいよね？♡』
その言葉で全てを察してしまった。
――――
――――
――――
「つまり、国家機密文書を見てしまった上に外堀はガチガチに超合金並みの硬さになってて、もうお前はファインモーション殿下のとこに輿入れしないと人生詰むってことか」
コクコクと高速で首を縦に振る友を見て、エアシャカールトレーナーは呆れた。
「……別に良くね？」
「いやでもさ、国家機密って言ったって文章読めないんだぞ？　写真だっていつものように思い出作りの一環だと思って……」
「んなの言ったところでいくらでも真実は捻じ曲げることは可能だろ。写真なんて特に」
「いやいやいや！　いいの？　写真や国家機密文書をこんなことに使っていいの？　俺みたいなやつ捕まえとくためだけにだよ？」
「知らねぇよ。そもそもお前が向こうの王様と腹割って話して担当になった時点でこうなる未来もあったろ」
「俺は純粋にファインが気持ち良く走れればいいなと思って！」
「じゃあどうすんだよ？　断るのか？　つかそもそもお前、普段から自分の担当のこと愛バ愛バって言ってんのに、好きじゃないのか？」
「……大好きです」
「担当としてってだけ？」
「……異性として大好きです」
「だよなぁ。知ってた。それとありがとう」
「へ？」
唐突に感謝されて困惑するトレーナーを他所に、トレーナー室へ黒服のウマ娘たちがザッと入ってくる。
「え、え、何？　何何何？」
「俺はお前の国籍が変わっても友達だと思ってる」

「は？」
　絶賛困惑中の最中、
「言質を取ってくれてありがとう。シャカールのトレーナーさん」
　ファインモーションがにこやかにいつの間にか敷かれていた赤絨毯の上を歩いてきた。
「いやいや、これくらいは。友達としては、やっぱり幸せになってもらいたいんでね」
「うふふ、お約束のモノは後日しっかりとお届けしますね」
「いやぁ、なんか悪いですね」
「それだけのことをしてくれたんですから、当然です。では私は彼とこのあと予定がありますからこれで」
「お幸せに～♪」
　そうしてファインモーションはＳＰたちに「例のモノを」と指示し、神輿を用意させ、そこへ自分とトレーナーが乗り、ＳＰたちに専用リムジンまで運んでもらうのだった。
◇
　トレーナーの思考が未だ迷子の中、ファインモーションが彼を連れてきたのは日本でも有名な三ツ星ホテル。
　その一室に通されると、
「キミは私の隣に座って、笑顔で頷いていればいいだけだから安心してね。あ、でもキミの笑顔は全て私だけのモノになるから、出来るだけ作り笑顔ね？」
　何やら説明を受け始める。
「え、あの、もし断ったら？」
「危険な目には遭わせたくないの。お願い」
　両手を握られ、今にも涙を流しそうな潤んだ瞳で上目遣いをされながら懇願されれば、トレーナーは頷くしかない。
「この手を使うのは最初で最後だから安心してね。こうでもしないと、私のことが大好きなくせに告白してくれないキミを置いてアイルランドに帰らないといけないから」
「ファイン……」

「大好きって言ったもんね？♡」
その言葉がまるで全身を拘束する鎖のような重さに感じるトレーナー。
「でもでもぉ、私はキミのこと愛してるから、愛の強さは私の勝ちだね♡　うふふ、これからの巻き返しに期待してるね♡」
小悪魔的な笑顔を浮かべてそう述べたあと、彼女はトレーナーの頬へ口付けを落とした。

無数のフラッシュライトが焚かれ、世紀の大恋愛の瞬間をカメラに収めていく。
集まった記者たちは各国から来ており、中でもファインモーションの祖国アイルランドからは記者団だけでなく国営放送局まで赴いてきて、自国の殿下の幸せな報告をアイルランド国民たちに生中継していた。
会見場に使われるホテルの大広間には、現役の駐日アイルランド大使と日本外務大臣が出席している。
会場の大型スクリーンには日本の総理大臣と秋川理事長、そしてファインモーションの父君であるアイルランド国王が笑顔で握手をしている様子が映し出されていた。
簡単に言えば、ファインモーションがトレーナーとの婚約を父に願い、父は愛娘のためにトレーナーへアイルランド国籍と永住権を与えたのだ。
会見はさもそうであるかのような台本通りの質疑応答。
二人の馴れ初め、トレーナーのどこに殿下は心を掴まれたのか、トレーナーが殿下をどのようにして支えてきたのか等々。
家格が違い過ぎるとの声には、
『現在のアイルランドは共和制。故に我が娘であれど家格など関係なく、娘がこの者と決めた相手ならば何も問題はない。既にこちらと日本の両政府で彼自身の身辺調査は終え、何も問題はなかった。強いて言えば、娘のことが好き過ぎるくらいか。父親として、ここまで娘に愛を注いでくれる人間は好ましい』

とアイルランド国王が公文書にしている。
トレーナーにはもう笑顔で頷く以外に選択肢は残されていなかった。
「トレーナー、今から私が言うことをそのまま言ってね♡　ちゃんと私の目を見て、この手を取って言うんだよ？♡」
「（コクリ）」
『Ｇｒａｉｍ　ｔｈｕ♡』
『……グラーイム・フー』
するとまたフラッシュライトの嵐が降り注ぐ。
「うふふ♡　発音はまだまだだけど、キミの言葉で聞けて幸せ♡　愛してるよ……ん～、チュッ♡」
感極まってファインモーションがトレーナーの頬にキスをすれば、それを全カメラが収めていく。
Ｇｒａｉｍ　ｔｈｕ
アイルランド語またゲール語で英語の『Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ』に相当する言葉。
◇
一躍時の人となったファインモーションのトレーナー。
あの会見から一週間が経った今でも、各マスメディアでは彼とファインモーションのことが取り沙汰されている。
しかしその内容の殆どは二人の関係に肯定的で、中にはアイルランドと日本の更なる友好や架け橋などともてはやされていた。
裏で否定的な内容もあるにはあったが、その全てをアイルランド国王自らが否定しているため、ネットを中心にただのやっかみだと判断されている。
「……もうダメだぁ……お終いだぁ」
「まだそんなこと言ってんのかよ。いい加減諦めて幸せになっちまえよ」
「裏切り者」
「俺は愛バが望んでいた、高性能パソコンを殿下にどうにか安く仕入れる手段はないか聞いてみただけだ」

「めちゃくちゃ買収されてるじゃないか！」
「でもお前は担当バと正式に婚約出来て、しかもそれは日愛友好の象徴ってなってるし、俺はシャカールにプレゼント出来たし、Ｗｉｎ―Ｗｉｎじゃね？　そういやお前が殿下からキスされてたあのワンシーンが記念切手や記念硬貨になるんだってな。おめでとうございます」
「……今に見てろよ」

―――――――――――――――

そんなやり取りがあってから、一週間後。
「なぁ、トレーナー」
「ん、どうしたシャカール？」
「今度良かったら一緒に旅行行かね？」
「お、いいな！　シャカールとはなんだかんだ温泉旅行以来どこにも行ってなかったし！　どこか行きたいとこあるのか？」
「……ド」
「え、どこ？」
「アイルランド」
「……Ｗｈｙ？」
「ファインモーションが卒業旅行にって招待してくれたんだ」
「あ、ああ、なるほど！　それはいいな！」
この時、エアシャカールのトレーナーはまだ知らない。
アイルランドにエアシャカールと訪れた際に、そこで強制的にファインモーションが手掛ける最高の結婚披露宴を挙げさせられることを。
卒業しているから結婚しても何も問題がないことを。
そしてエアシャカールが担当トレーナーのことが大好き過ぎて、ファインモーションとそのトレーナーに唆されたということを。
◇そんなドタバタな日々から数年後◇
広大な敷地。聳え立つ城。
城内のファインモーションとその夫であるトレーナーが暮らす二人だけの宮。

「ここの生活にはもう慣れた？」
「ああ、うん、なんとか……未だに執事さんとかがいるのには慣れないけど」
「うふふ、戸惑ってるアナタはかわいいね♡　チュッ♡」
「ファインは本当にキス魔になったね……」
「そんなこと言うの不敬だよー？♡　私がキスを送るのはアナタだけなのにー♡」
「身に余る光栄だよ」
「えへへ♡　あ、明日エアグルーヴたちを連れてきてもいいかな？久し振りにみんなと会いたいの。みんながどんな夫婦生活を送ってるのかも知りたいし。あ、ちゃんとみんなには明日迎えに行くねって伝えてあるからね！」
「相変わらず、まるでコンビニに行くかのような気軽さで言うね。慣れたけど」
「？　だって自家用ジェット飛ばせばすぐだよ？　それにアナタとキスしてればすぐに日本に着いちゃうんだから♡」
「……あれ、俺も行くの？　俺明日も仕事なんだけど……」
「貴様、私の命令が聞けぬと申すのかー！♡」
「ファインがそう言う時点でもう俺の明日の仕事は代わりがいるのね。分かった、お供します」
「ふふっ、しっかりエスコートしてね……ん～、チュッ♡」